

---

Dear **大切な人へ**

志雄 小翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dear 大切な人へ

### 【Nコード】

N3912K

### 【作者名】

志雄 小翔

### 【あらすじ】

作者の文才が乏しくて、読み返してみてもかなりの読みづらい箇所を発見しました。

修正する前に読んでくださった読者の人にはとても申し訳ありません。結構な台詞が変わったり増えたり減ったりしています。

本当に申し訳ありません！

主人公 武内正午は、とある小さな劇団に所属している大学生。

彼は楽しい仲間、頼れる先輩、そして優しい彼女に囲まれながら幸

せな日々をおくっている。

でも、そんな彼には誰にも言うことができない深い心の傷を持っている。

それは、自分の親友を目の前で亡くしてしまったこと……。

友の死から、初めて訪れる冬。

この季節が、正午、そして仲間たちに様々な思いを抱かせる。

嘘、偽りのなか、あなたは自分の本当の気持ちを見つけることが出来るますか？

## はじまり

オレは一人の友を亡くした。

物心つく前から一緒にいた友を無くした。

小学校、初めて劇を創った。あの時はどんな些細なことも新鮮で楽しかった。

中学校、アイツとオレ、そして協力してくれた友達と共に一から全てを作り上げた。

高校、中学校とは大違いだ。先輩たちの演技はオレたちに感動をくれた。

「オレたちも、いつの日か先輩たちみたいに他の人に感動を与えたい」

そう誓った。

そんなお前がいなくなった。

もう二度と会うことができない。

オレはお前との最後の約束を必ず守る。

それがオレに出来るたった一つのことだから

だからオレは、どんなことがあってもあの娘を守る。

どんなにわが身が傷つきようとも。

最後の約束は絶対に守る。

我が友よ

見ていてくれ。

あの空の向こうから、オレたちを見守っていてくれ。

「知ってるか？ 昔の人の言葉で『幸運だったのではない。私はそれだけの努力をしてきた』って言葉があるんだぜ」

これは去年死んでしまったオレの親友、鈴木優作すずきゆうさくの口癖でどこかの国の元首相の言葉だ。

「だからな、最高のものを作り上げるのに必要なのは『運』じゃなくて『努力』なんだよ」

オレや仲間がサボっていたら、必ずこう言っていた。

……お前は最高のものを作り上げることができたのか？

オレは何も答えてくれない「闇」に、問いかけた。

「……ゴ、シヨーゴ、起きろ！ シヨーゴ！」

同時に何かがオレの頭をたたいた。

「ッ！ なんだ！」

オレは自分の頭を抑えながら起きた。

寝ぼけ眼で辺りを見渡すと、そこはオレの通っている大学、神田大学の一室だった。そしてオレの前には、一人の男がニヤニヤと笑

いながら立っていた。

「やっと起きたか。もう講議は終わったぞ！」

そいつは、悪びれた様子も無く、オレを殴ったであろう本を持ち、笑顔で言っ てきやがった。

こいつの名前は、ささがわけんと笹川健人。

黒髪の短髪、身長は、170cm後半くらい……認めたくないがなかなかのイケメンである。その癖にして優しくて気の利く正確だ。……よく考えると、コイツ非の打ち所がないなあ。

オレの友人の一人で物心つく前からずっと一緒にいる親友。

そして今、コイツに叩き起こされたのがこのオレ、たけうちしんご武内正午だ。

身長、頭脳、運動、顔、すべてが普通の大学生。

この前、友達と遊びに行ったとき「オレって何にも取り柄がないなあ。せめて顔が良ければなあ」と言ったら、「死ね！」とか「消え失せる!!」とか「俺達に対しての嫌味か!?!」「この男の敵!?!」と言われた。

……何でだろうな？ ま、ヤツ等にはキチンと制裁をしてやったけどな！ お前等、多一で挑んどいて負けるのはダサいぞ？

……、自分のかんだけか思ったが、考えるのが面倒になった。ダルいし……、自分のことを悪く言っていると悲しくなるし……。

「起こしてくれるのはありがたいが、もっとやさしく起こしてくれないか？」

健人のせいで、目は完璧に覚めてしまった。服着てる時はわからないけど意外とマツチヨなんだよ。なのに、力加減を知らない……。ムリだ。お前は叩かないと絶対に起きないだろ！」

健人はオレを叩いたと思われる本で叩くふりをしながら言った。

力加減は知らないのではなく、する気がないだけか？ コイツの笑顔を見たら、そんな疑問が出てきた。

「早く飯食ってサークル行くぞ！」

屈託のない笑顔のまま、健人はオレを急かした。

ウンツ、きつと健人は力加減を知らないだけだ！ そう無理やり自分を納得させて、健人の後を突いていった。

今日は十一月二十日金曜日。

もう冬の季節だ。食堂の窓は白く曇っている。今年は例年希に見る寒さだと天気予報のお姉さんが言っていた。

近所の子供も「雪降らないかなあ」とか言って騒いでいた。オレも雪は降ってほしい。っていうか寒いんなら、せめて雪くらい降ってもらわなくちゃオレのモチベーションが上がらない。

そんなことを考えながらオレは、暖房の効いた暖かい学食にて、オレの好きな食べ物ランキングトップ5に入るかから揚げがたくさん入っている「から揚げランチ」をおいしくいただいた。ついでに健人はオレの前の席にて、あたたか〜いソバをズルズルと食べていた。

そして食事が済むとすぐに、オレたちはサークルの部室に向かった。オレたち二人は、この大学の中の文科系サークルのひとつ、演劇サークル「かんげきがん」に所属しているのだ。

メンバーは七人。先輩は三人。

部長の三年生塚本龍人先輩、身長はオレと健人の中間くらい。髪は、男子にしたら長い部類に入るこげ茶色。性格は、真面目だが、硬い感じはしない。

同じく三年生の野乃原雅先輩ののらみやび、一言で言うと大和撫子。白い肌で、真っ黒な髪を腰くらいまで伸ばしている。背は165cmくらい。めっちゃくちゃ美人。着物が似合う東洋美人。

そして二年生の秋谷恵先輩あきやめぐみ。茶色い髪でボブカット、背は低め。顔は、綺麗と言うより可愛い。見てる人を和ませてくれる人。

みんなとてもいい人たちだ。あとの二人は同級生の小川春樹おがわはるきとサジ・グレゴリウス・雅人またとというイギリスハーフのやつらがいる。人数は少ないが、高校時代の仲間たちに助っ人を頼んでみんなで頑張っつて劇を作っている。アットホームなサークルだ。

ついでにサークルの部屋は、七人で使うには少し……かなり広い部屋。だから、劇の小道具のほかに漫画やらゲーム機、サッカーボールから野球ボール……みんなの私物が置いてある。

たまに、オレは雅先輩が片付けてくれているところを目撃する……。

「こんにちは」

健人は勢い良く部室のドアを開けて先に集まっているであろう人たちに挨拶をする。オレも健人に続いて「ちわーす」と挨拶をして部室に入った。

すると予想通り、先輩達はすでに部室にいた。でも、みんな何かを囲みながら何かをしていたのでオレたちが入ってきたことに気がついていない。

そして、オレ達が少しその光景うを見ていたら、オレたちに気づいた一人の大学生には決して見えないような男が急いで駆け寄ってきた。

「シヨーゴ！ ケント！ 大変なんだ！」

この焦っているのが小川春樹。クルクルな茶色の髪で、身長は雅



先輩くらい。性格は優しく大人しい。顔は、ハッキリ言ったら中学生にしか見えない。いわゆる童顔というやつだ。

「ま、とりあえず落ち着け、な？ はい、深呼吸」

オレはとりあえず、子供を落ち着かせるような感じで見た目中学生を落ち着かせてみた。焦っても良い結果は出ないからなあ。

「あ、うん、すー、はー」

子ども扱いされていることに気づいていない春樹は、素直にオレの言うことに従っている……。

「それで、何かあったのか？」

落ち着いた春樹に健人が聞く。そして、春樹がゆっくりと口を開いた。

「サジ君が、池に落ちたんだ」

……………？

「……………は？」

「だから、サジ君が池に落ちちゃったんだよ」

もう一度、でも先ほどよりも大きな声で春樹が言った。

「なんで！」

春樹の後ろを見てみると、確かに三人の先輩たちに介抱されているサジの姿が見えた。

身長は春樹くらいで小さめ。お父さんがイギリス人でお母さんが日本人。

去年の劇の発表の時に見たことがあるが、お父さんの背は190cm近くあった……見事にお母さんの血を引いてしまったのだろう。顔は、かっこいいというよりは可愛い部類。髪は金色、春樹よりもクルクルな髪をしているが、それがより一層サジを子供っぽくさせている。春樹とサジ。この二人が平日に二人だけで街中を歩いたら、確実に補導をされるだろうなあ。

性格は、頭に「超」がつく位の天然だ。…………いい奴なんだけどね。

……なぜだか知らないけど、こんな説明がオレの頭の中に駆け巡った。

「何でまたこんな真冬の池に落ちるんだよ！ 普通落ちないだろ？」

先ほどとは打って変わって、今度はオレたちが焦ってしまった。

「それがね、サジ君が劇の台本を読みながら歩いてたらね、そのまんま池に落ちちゃってドボン！」

「ハアア」

春樹の身振り手振りの説明を聞きながら、思わずため息をついてしまった。

実に馬鹿らしい理由だ。……どうやってたらそうなるんだよ？ いくら見かけが中学生でも、普通そんなことで池に落ちないだろ。

「シヨ、シイ、シヨーゴー。そ、それに、ケツケント。おはよー」  
サジは歯をガチガチ震えさせながらオレたちに挨拶をしてきた。

……なんだか無性にかわいそうに思えてきてしまった。

その後しばらくは池に落ちた可哀想な大学生（見た目は中学生）の介抱をみんなですることになった。

服が乾いてサジが落ち着くと、「風邪を引いたらまずいだろう」という理由でサジを無理やり家に帰らせた。

風邪だけは引くなよ、サジ……

「それにしても散々だな」

サジが帰ってから、部長の龍人先輩がため息混じりに言った。

「全くです。まさか台本まで紛失してしまうなんて……」

雅先輩も続く。

「台本が落ちたってどうしたんですか？」

これは健人だ。

「実は、新しい台本がサジ君と一緒に落ちちゃったのよ……」  
後ろにいた恵先輩が教えてくれた。

そして、落ちた台本は、今度の学校主催のクリスマスパーティーの時に出す予定の劇の台本であろう。雅先輩が作っていたのだ。

「マジっすか？ コピーとかは？」

なるべく龍人先輩と雅先輩に聞こえないように小さな声で尋ねた。  
「ないのよ……。今日みんなに見てもらった後に、軽く手直して  
をしてコピーする予定だったからあ」

「……ついでに、どこに置いておいたんですか？」

少し考えてからオレは言った。

なぜなら！！ 彼の天然ツぷりを考慮して、このサークルには暗黙のルール「部室に誰もいない時に、サジの興味関心意欲をそそるものを簡単に放置していない！」というものがあるのだ！

「私の失態です！ ほんの少しの間、席を外すだけだと思って片付けずに行ってしまったのです！ 本当になんてことを！」

聞こえてしまったらしく、雅先輩が自分を責めるように言った。  
そしてすぐに「雅の所為じゃない。だから気にするな」と龍人先輩が優しく慰めていた。

……なんだか、こんな風になると、言ったオレのほうが悪感が出てきてしまう。

……ま、サジは悪気があってやったのではないであろう。きつともう役作りをするために置いてあった台本読んだ。

頑張り屋なんだけどどこか抜けている。あいつはそういう奴だ。

とオレは勝手に自己完結をして現実逃避を始めたのだった。

「はぁー！ー！」

そして部屋には気まずい空気が流れる。

だがしばらくすると、ドーン！という勢いの良い音を立てて部屋のドアが開いた。

一同はドアの方に一齐に振り向く。すると、そこには二人の女子高生と一人の私服姿で長身な男が立っていたのだ。

「おい！ ショーゴ！ 何油売つとんやあ！」

私服の男がいきなり、見事な関西弁で言う。

「正午さん。今日は二時から劇団の次回作に向けてのミーティングですよ」

制服姿の女子高生も言った。

もう一人のほうは、今しゃべった女の子の影に隠れている。小さな声で何か言っているが、あまりにも小さくて聞き取ることができなかった。

「ミーティング？ ミーティング……ミーティング。」

「あつー！」

思い出したぞ！ っていうか完璧に忘れてた！ ケータイにも何通もメールが着ていた。そして時間はもう三時を過ぎている。

今来たのはオレが所属している学外の劇団「季節」のメンバーだ。私服姿で関西弁の男の名前は早蕨遼。

劇団季節の役者たちのリーダー的存在。そして、この人はオレの高校一年生の時の演劇部の部長だった。頭も良かったし演技の腕もすごかった。さらに高校を卒業して、本人の第一志望であった医大に進学したのだ。

身長は、高いほう。言いたくないが、超美形。そこら辺のモデル

よりもかっこいい。髪を後ろで結んでいるのだが、まったく違和感がない。

女子高生のほうは、鈴木琴音。

劇団季節のトップクラスの女優、よく劇のヒロインを任されている。

そして、去年なくなったオレの親友、優作の妹だ。さらに、今年の一月に告白されて、今では俺の彼女。

身長は、150センチ後半。髪は少し茶色がかかった黒。それをツインテールにしている。性格は、少し子供っぽいところがある。昔は自分のことを「私」と言っていたが、最近は、「琴音」と呼ぶようになっていいる。これでも、来年からは大学生になる。

……そして、ずっと琴音の後ろに隠れている小柄な女の子は、なまけつ驚沢茜ちゃんだ。あかね

いつもは大人しいけど、舞台上に立つと人が変わったかのように役になりきる。

琴音とよくヒロイン争いをしているらしいが、どっちがヒロインになってもお互いがケンカすることはない。むしろヒロインになったほうを応援してる。琴音のすばらしい親友だ。

背は、琴音よりも小さくて、そのことを言うのと部屋の隅に行っていじけてしまう。

髪は黒のセミロング。性格は、大人しくて、周りにいる男達が思わず「守ってあげたい」と思ってしまう。

今考えると、オレの周りって美男美女が集まってるなあー。

「……………ごめん。忘れてた」

そう言うと三人はあきれた顔でこっちを見た。

「今日のはなあ、クリスマス劇をきめるっちゅう大切な集まりな

んや、それを忘れるたあワレええ度胸しとんなあ!!」

「遼先輩。落ち着いてください! 関西弁が出てますよ」

琴音と茜ちゃんは怒っている遼を落ち着かせてくれた。

遼は関西のほう出身だから、怒ると関西弁になってしまう。

「待ってて急いで行くから!」

オレがあわてて用意をする。すると、後ろにいた龍人先輩が何かひらめいて亨に話しかけた。

「遼さん、ですよね?」

「ハイッ? なんですか?」

二人のおかげでクールダウンをした遼は標準語に戻っていた。そして、いきなり名前を呼ばれたので驚いて敬語にもなっていた。そして先輩は続ける。

「いきなりすみません。そちらの劇団の次回公演や劇の内容はすでに決まっていますですか?」

「いえ、ただだけど。それがどうしたんだ?」

何を言っているのだろうか?

「私たちのサークルでは今度クリスマスに学校主催のパーティーをやるんですけど。もし、よろしければ一緒に劇をやりませんか?」

この発言には、この部室にいるみんなが驚いた。そして、さらに驚くことに遼がいう。

「ええ。別にかまいませんよ」

……カマイマセンヨ? ……カマイマセンヨっていったい?

まるで、時間が止まったみたいだ。

そして、オレの言葉によって再び時間は動き出す!

「かまいませんよって、ダンチョーに断りも無くないの!?!」

ダンチョーとは季節のオーナーでもあり、ここからすぐ近くにあ

る総合病院の院長。そして遼の父親、早蕨風明はやずけふうめいさんのことだ。

歳は50歳前半、みんなを包み込んでくれるようなオーラがあふれている。

「大丈夫でしょ。親父ならオッケーくれるよ」

ニツと笑いながら遼は言い切った。

ついでにダンチョーというニツクネームは、オレが「季節」に入りたての時にふざけて言ったらみんなに広まってしまったのだ。

そしてこのわずか数分で、オレ達「かんげきだん」と「季節」のこれからの予定が話合われていった。

龍人先輩はもう大学から許可をとった。これは龍人先輩の交渉のすごさを物語っているしかも公演時間は、パーティーの始まる直前だ。

パーティーが盛り上がる上がらないはオレたちの腕にかかっているから、責任重大になってしまった。

そして今、遼たちはは台本について話し合ってるみたいだ。

「こつちにクリスマス系の台本が何冊があるけど。もしかしてそつちがもう作ってある？」

「こつちのは、ちょっとした事故で台本は紛失しちゃって……」

「今こつちにあるのも全部ビミョーなんだよねー」

いつの間にか、このふたりは砕けた感じに喋れる仲になっている。

こつちは

「正午君と仲良さそうだけど二人はどういう関係え？」

恵先輩はふざけ半分で琴音に質問していた。そして、健人が余計なことを言ってしまう。

「あのふたり恋人同士なんですよー」

「えー？？？ 本当にい？」

恵先輩はワザと大げさに驚いた。

「あの正午にこんな可愛らしい彼女がいるなんて驚きですわ」

「雅先輩、後で正午君を問いつめよお」

……後で絶対聞かれるな。覚悟しとこう。

「正午、お前のところに何かいい台本無いか？」

龍人先輩と遼がオレに聞く。

オレはいきなりの質問に焦ってしまう。そのせいで口を滑らせて  
言ってしまった。

「ふえ、たしか昔作った劇でクリスマス向けのやつあったはず……」

「あるのか！ じゃあ、それで決定！ お前の持つてる脚本は面白  
いが多いからな。きつと大丈夫だろ」

遼がすぐにオツケーをだす。

「いやっ！ でも確か、あれ子ども向けですよ！ それに……」

オレは言葉が詰まった。咄嗟に言ってしまったけど……

「??？ それに……ってどうしたんだ？」

遼は歯切れの悪い答えをしたオレを問い詰めようとした。

「……」

俺は遼の質問に答えることができなかった。

なぜかというとその劇は、オレ、優作、健人、琴音が初めて作った  
劇だったからだ。

でも、そんなことを言えるわけがなくオレはただ黙るということ  
しかできなかった。

「この劇の最後の辺りで、俺たち大学生がやるには少しはずかしい  
シーンがあるんですよ。……子どもがやるならあんまりおかしくな  
いんですけどね、俺たちがやると……」

健人が笑いながら助け舟を出してくれた。健人は笑っているが、  
きつとオレの心境を察してくれたのだろう。



「そうなのかあ……」

健人の言葉で納得した先輩たちはちよつと考えてから言う。

「じゃー、すこし台本を改造してやってみるのはどうだ？」

「それならたぶんオツケーです」

健人がオレの顔を見てから言う。オレも「それなら」といった了解した。

「んじゃ、台本は正午と健人に頼めるか？」

「わかりました。でも、二日くらいはかかりますよ？」

「そのくらいは大丈夫だろ。じゃー、来週の月曜日に持ってきてくれよ」

「わかりました。期待しててくださいいね」

……ありがとう。健人。

「……あのお、お話が盛り上がっているところすみません。」

しばらくして、隅のほうにいた茜ちゃんがオレたちに少し……いや、かなり遠慮した様子でいつてきた。

「お時間が」

「ん??」

そう言われた遠が時間を確認する。オレたちも時計を見る。

五時三十分

「……あれ？」

ゴシゴシ。目をこすってみる。さあ、もう一回時計を見てみよお

五時三十分

変わらないや ……今キモイって思ったやつ殺すぞ。

「あー！！」

オレ、遼、琴音の三人はそろって叫んだ。

やばい、もうミーティングが始まって三時間くらい経っている。

それなのにリーダーポジションの男優、女優たちがこんなところにいる。……メツチャやばい。

オレはすぐにケータイを取り出して、急いでダンチョーに電話をした。ダンチョーは「大丈夫、待ってるから早くおいで。」と優しい声で言っていた。

でも、後ろの方では怒鳴り声がいっぱい聞こえた。……それは聞こえない振りをしておこう。

「みんな待ってくれてるみたい。急いでいこう！」

すると遼がいった。

「今日はサークルの人たちも連れて行ったほうがいいんだろ？ でも、俺の車にこんなには入りきらないぞ？」

遼たちはここまで車で来たらしい。でも大丈夫だった。

「それは大丈夫。みんな学校までバイクと車で来てるから」

そうなのだ。このサークルは気分転換するときは、みんなでドライブに行く。だからみんな学校にはバイクや車で来ているのだ。

オレたちは急いで自分たちの愛車に乗り込んだ。

そのとき琴音がオレのバイクに乗ろうとした。でも、「今はだめだ。……今度遊びに行くときに乗せてやるから」と言って強引に琴音を遼の車に押し込んだ。

そして劇場には、モノの十分で到着した。

オレ達劇団が使わせてもらっている劇場はとても大きい！ 五百人くらいは入れるくらいだ。こんなところが使えるのは、すべてダンチョー様のおかげだ！！！！

……その後は大変だった。オレと遼、琴音、茜ちゃんは劇団のみんなにたつぷり絞られたのだ。そして一時間くらい絞られて、やっと大学であったことについて話すことができた。

話を聞き終わったダンチョーは、しばらくの間「うーん」と唸りながら一人で考えていた。

そして、五分くらいがたっただろうか？　ダンチョーはゆっくりと口を開いた。

「……すでに大学の方には話を通っているのですか？」

「ハイッ！　もう許可はもらいました。パーティー開始の前の時間に公演することになりました。これがそのタイムテーブルです」

さすが龍人先輩。仕事が速い。

「……わかりました」

ダンチョーは、龍人先輩から渡されたタイムテーブルをざっとみて立ち上がった。そして龍人先輩に近づき、手を出しながら言った。

「この劇、絶対成功させましょう！」

ダンチョーの許可も出て「季節」と「かんげきだん」は共同で劇作りをやることになった。

そして、今日はもう遅いので高校生以下は帰ることになり、オレたち大学生以上はみんなの親睦を深めるという理由で、総勢二十人近くで飲み会に行くことになった。

オレ、健人、春樹は未成年だがみんなの足になるために無理やり連れて行かれた。

高校生以下の子どもたち、それにその子どもたちと一緒に劇団に入った保護者の人たちが劇場から帰っていくのを見送って、オレたちは劇場の駐車場に向かった。

「……っで！　なんで琴音と茜ちゃんは行こうとしてるんだ!？」

駐車場に向かっていく集団の中に、当たり前のようについてくる

二人の姿があった。

「大丈夫ですよ。琴音は、お母さんには正午さんのところに泊ま  
て行くって言っておきましたし」

「お、お熱いねーお二人さん！」

「ヒューヒュー。見せつけてくれちゃって!!」

そういうと周りでみんなが冷やかしてきた。……少し頭が痛くな  
る。

オレは大学に入学してから大学から近くにあるアパートで一人暮  
らしをしている。だから彼女がオレの家に泊まってもオレ以外の人  
には迷惑がからない。いつも断っているのだが、最後は琴音に負  
けてしまいしょうがなく泊めてあげているのだ。結局、今日もそう  
なるのだろう。

「ハァー。……お前はそれでいいかもしれないけど、茜ちゃんはど  
うするんだ？」

「それも大丈夫です。茜ちゃんも劇団の友達の家泊まっていっ  
て連絡してましたし」

「正午は二人の女の子に手をだすのかー」

「この、ロリコン!!」

「へんたーい!!」

至る所でオレに対して野次がとんできた。……うん、今「ロリコ  
ン」って言ったヤツと「変態」って言ったヤツ、待っつけ、二度と  
喋れないようにしてやるからな。

「茜ちゃん。本当に大丈夫？ 無理してない？」

やっぱり不安だから直接本人に聞いてみよう。

「……わたしは大丈夫です。無理なんてしてないです。それに、  
……もいるから」

最後のほうはゴニョゴニョして聞き取ることができなかつた。ま  
あ、琴音もいるし、本人も大丈夫だと言っているから、しょうがな

く！ 二人も連れて行くことにした。

そして、飲み会が始まった。オレ達の席は遼、龍人先輩、雅先輩、恵先輩、琴音、茜ちゃんと、若い組みの席だった。オレ、健人、春樹の未成年の男はバラバラの席に着かされたのだった。

「それじゃあ、自己紹介。俺は早蕨遼。千葉大の医学部四年に在学してまーす」

するとみんなは「スゲー！」等と感嘆の言葉をあげていた。……なんか合コンみたいなのりで自己紹介をやってんなあ。

「それじゃあ、次！！」

そういつて遼は龍人先輩を指した。

「えっ、俺！？」

「そうそう。早くしろって！」

「ええ。まあ、俺のこと知らないのは遼とその女の子くらいだけど……俺の名前は塚本龍人。神田大学英文科三年に所属。趣味は……」すると遼が言葉を遮って言った。

「はいっ！ 次！」

「つてオイ！ まだ……」

「野郎の何か聞いてもつまんねえだろ。そんなことより次々！」

遼はそういつて龍人先輩の自己紹介を強制的に終わらせた。そして、次は雅先輩の番だ。

「私の名前は、野乃原雅と申します。彼と同じく神田大学英文科三年に所属しております」

雅先輩はいつものように優雅に席を立ち自己紹介をした。

すると、遼が質問！！

「もしかしてなんだけど、雅ちゃんつてあの野乃原食品会社の？」

遼は何か知っているのか？俺はそんなこと聴いたこと無いけど。

……それに雅ちゃんつて。なんだか先輩に「ちゃん」づけなんかにあわないなあ。

「ええ。野乃原食品は確かに父の会社ですけど、どちらでそれを？」  
「えー！」

俺は驚いた。隣でも琴音、茜ちゃんも驚いていた。

「じゃあ、雅先輩は社長令嬢ってことですか!？」

……知らなかった。立ち振る舞いからして、どこか良家のお嬢様とは思っていたけど社長令嬢だったなんて。

「社長令嬢とはいってもそこまで大それたものではありませんよ」

雅先輩は落ち着いた口調で続けた。

「それで、遼さんはどちらでそれを？」

「ああ、俺の親父の病院の食事って野乃原食品からのを使ってるらしくてさ。その社長さんにも俺と同じ年くらいの娘がいるって親父から聞いたんだ」

「ああ。それですか」

世界は広いようで狭いとはまさにこのことだな。

「それじゃ、次。そこのお姉さん」

今度は恵先輩だ。

「秋谷恵って言いますう。先輩たちと同じ大学、学科に入ってる二年生ですう」

「へえー。じゃあ、年は二十歳？」

「そおですよお」

「彼氏とかは？」

「そういうのもいませえん」

「じゃあ、今フリーなんだ」

遼はニヤニヤ笑っている。恵先輩を口説くのか？

「そうですね。でも、私い軽い女ではないですからねえ」

恵先輩も笑っている。遼にはこの人は絶対におとせないだろうな。なんだかこの一瞬でそう感じた。

「なんだ、残念。それじゃあ、今度は高校生の自己紹介ね。ハイッ、茜ちゃん」

そういつて呼ばれた茜ちゃんは、いきなり小さく……もともと小

柄なんだがいつもよりさらに小さくなってしまったように見えた。

「わ、わたしは……驚沢茜って………言います」

茜ちゃんは、ただそれだけ言った。

そして、言い終わるや否や茜ちゃんは顔を伏せてしまった。

この子は合コンとか絶対できないタイプだな。だが、その反応が雅先輩や恵先輩には好評だったらしい。

「カワイイ。ねえ。この子お持ち帰りしちゃだめえ？」

……そんなことをしたら犯罪ですよ恵先輩。

「フツ。初々しくて可愛いですね」

まるで親戚のお姉さんみたいな言い方だな。

「えっ………」

さらに茜ちゃんは小さくなっている。

「これ以上やると茜ちゃんが消えて無くなっちゃいそうだから、次、  
琴音ちゃん」

遼は、今度は琴音を指した。

確かにこれ以上茜ちゃんにちょっかいを出したら、彼女は本当に消えてしまいそうだ。

「はい！ 鈴木琴音っていいま………」

「質問！ 正午君とはいつから付き合ってるのぉ？」

「質問！ 正午との出会いは？」

「どこに惚れたのぉ？」

「もしかして正午から告白されたんですか？」

琴音の自己紹介は、先輩方の質問で遮られた。

「ええっと、琴音と正午さんは………」

「キスとかしたの？」

「どこまでいったのですか？」

二人はとにかく琴音を質問攻めした。オレは被害の及ばぬように隅のほうに行った。

「でっ、実際のところどうなんだよ？」

…… オレの考えは甘かつようだ。オレは龍人先輩そして遼からの質問攻めにあつたのだった。

そして、

「酒がなくなったよお！ おかわりいー！」

「はい」

「しよーごー。こっちでお酌しろよー」

「ちよつと待つてくださーい」

酒が入るとみんないつもの二倍はワガママになつてゐるな。

え、オレも酒を飲めばいいじゃんだって？ そんなのダメだよ！

二十歳になるまで飲酒はしちゃダメなんだからね！

「この娘たちにも飲ませちゃつてもいい？」

「それはダメですよ、恵先輩！ 未成年にお酒勧めないでください！」

「今度ワイとデートせえへんか？」

「えっ…… そんな、わたし……」

「遼、口調が戻つてゐる！ それに茜ちゃんを口説くかないで！」

ああ！ もう大変だ！！

ふと健人のテーブルを見てみると、

「おい！ ボーズは飲まないのか！？」

「俺はムリっす。まだ未成年だし」

「固いこと言うなよ！ おっちゃんかボーズ位の年の頃は……」

「あんたのその話何度目だい？ 耳にタコができちまつぜ」

「そんなことよりウチでバイトしないか？ 給料弾むぜ！」

健人の隠れマッチョを見抜いたのか、健人は勧誘を受けている。

「それはまた今度お願いします……」

「それならこっちも頼むよ！ 新入りがすぐ逃げちまつて」

「それも後で聞かせてもらいます！」

「酒が足らねーぞ！ 追加！」



「つまみも足らねーぞ!」  
「はい! 待ってください!」

……なんだあの席は。ウチにの劇団にあんな体育会系の人いたっけ?

さて、春樹の方は……

「ねえ。私と付き合ってみない? お姉さんが優しく教えてあげるわよ」

「ボ、ボクは……」

「わああ。本物のボクっ子なんてはじめてみたあー」

「ねえ、その子を独り占めしちゃダメよ。こっちにいらっしやい」  
「えっ……」

見る見るうちに、春樹が真っ赤に染まっていく……

「今、付き合ってる娘とかいないの?」

「それは、いません……」

「好きな娘は?」

「そ、それは……」

「いるの!? いるのね!? どんな娘?」

「いや、それは……」

「もしかしてここにいるの?」

「……」

「いるの!? どの娘どの娘?」

……あんな人達もいたっけ?

こっやって見てみるとオレの席が一番まともだなあ。

「シヨーゴ! 早くしろ!」

「ハイ!」

「茜ちゃんが倒れちゃったわよあ。」

「はい!?!」

「正午さん、お水!!」

「ちよつとまつて!」

前言撤回。ここも十分やばい。

「だから、俺まだ未成年ツスよ!」

「ボクは、そんなんじゃあ。」

「今度は琴音ちゃんが寝ちゃったよお」

「マジツスか!?!」

もうこの調子で飲み会で、オレたち未成年組は大変だった。

健人はずつとおじさん方に酒を飲め飲めいわれ続け、春樹はお姉さん方にからかわれ続けていた。

そしてオレは、酒のお酌やら琴音との関係についての質問、匂いで酔っ払ってしまった茜ちゃんの介抱。そして途中で寝てしまった琴音の世話………本当に息をつく暇もなかった。

結局最後まで生き残ったのは未成年のオレたちを抜かしたら雅先輩ただ一人だった。

「先輩は大丈夫なんですか?」と聞いてみたら、

「ええ。まだまだいけるわよ。」と笑顔で答えられた。

たしか、何人かと飲み比べとかしてなかったっけ?……この人と飲むのだけはなるべく控えるようにしよう。

……そして、オレはこの飲み会でひとつ学んだ。

もう二度と、このメンバーで飲み会に行つてはいけない!!



彼女のために……（前書き）

この話もです……。編集する前に読んでくださった皆さん、本当に  
申し訳ありません！

彼女のために……

翌日十一月二十一日土曜日

すこし肌寒いがとても爽やかな朝だ。だが、オレの気分はこの爽やかな朝とは対照的でとても疲れていて眠かった。体を伸ばすと体の節々からパキパキと音がした。なぜなら、オレは床で寝ていたからだ。

結局、昨日は先輩たちを送ったりしていたら二時くらいまでかかってしまった。

それに「酔っている茜ちゃんを誰の家に泊めるのか？」という問題も残っていたのだ。酔ってしまったので、絶対に家に帰すわけにはいなくなってしまった。そしてオレの家は三階建てのアパートの1LDKの一室。だから、二人も泊めてあげるだけの場所が無い。

そんでもって、今この場にいる人はオレ以外はほとんど茜ちゃんと面識が無い。

そして、茜ちゃんが起きたときに見ず知らずの男の家だった、なんてことがあったら、彼女は確実に卒倒してしまう。

なので、初対面で酔っていて、少し……イヤッかなり心配だったが雅先輩に茜ちゃんを任せることにしたのだ。

その後、迷惑なことに疲れて眠ってしまった琴音をおぶって家に帰った。起こそうと思ったが、こんな時間に騒がれたら近所の迷惑になってしまうからだ。当然、彼女に変なことはしていないぞ！

……眠いし体が痛い。今日は講義は休みだから寝直すかな。

そう思って毛布をかぶった。今の状態なら、オレはすぐに眠れる！  
だが、それはすることができなかつた。

「正午さん！ もう朝ですよ！ 起きてください。朝ごはんの支度できましたよ」

そう言っつて、オレの毛布を剥ぎ取られてしまった。

「……………たのむ。……………もうすこし、ねかしてくれ。ねむいんだ」

先輩たちの相手やお前をおぶつて三十分くらい歩いたから疲れてるんだよ……………。

「ダメですよ。昨日お店に行く前に、明日バイクでどこにでも連れて行ってくれるって言っつてたじゃないですか！」

……………そんなこと言っつたかな？ でも、これ以上寝ていると、琴音のわがままモードが発動してしまう。朝からあれはつらい。なので、オレはしぶしぶ起きたのだった。

「はぁー……………それで、どこに行きたいんだ？」

琴音のつくつてくれた朝ごはんを食べながら聞く。おつ、今日は洋食か。

彼女はオレの家に泊まった時は必ず朝ごはんを作ってくれるのだ。それに、彼女が作ってくれる料理はひいき目なしでおいしい。彼女の特技のひとつである。今日の朝ごはんは、トーストとベーコンエッグ、それにプチサラダと牛乳。

「じゃー、琴音は海まで行きたいです」

そしてベーコンエッグを口に運んだときに、彼女はオレの問いに答えた。

「この季節に海は寒いぞ？」

真冬だし……………。

「いいんですよ！……………それで、その後はいつものところに」

その瞬間彼女の声が、よく知ってる人でないと気づかないくらいのはんのわずか、声のトーンが下がった。琴音の言っつた「いつものところ」とは彼女の兄の墓、つまり優作の墓のことだ。

オレら二人は劇団の次にやる劇の内容がが決まると、いつも優作

の墓参りをしている。だから、優作が亡くなってから一年も経っていないが、もう優作の墓参りに行くのは十回を超えている。……いつまでもアイツに頼る訳にはいかない。でも、わかっているてもアイツを頼ってしまう。

そんな複雑な心境だったがオレは、琴音の作ってくれた朝ごはんをすばやく食べ終え、急いで支度をした。わかっている。でも……。

そして、二人で劇場まで昨日止めておいたバイクを取りに行った。

場所変わり、ここはオレの家からわりと近い所にある海岸。

「やっぱりこの時期に海は寒いなー」

さすがにもう十一月の後半、冷たい風が吹いてくる。当然、海にいるのはオレたち二人だけだった。

とても寒いけど、琴音はとても楽しそう。なぜかというと、彼女にはこの海に思い出があるのだ。

ここでオレと琴音は付き合い始めたのだから。

「いいじゃないですか！ 私たちの貸切ですよ。それに……」

クルクルッと回っていた琴音はオレに近づいてきた。そして、無防備だったオレの腕にいきなり抱きついてきた。

「こーすれば温かいですよ」

オレの腕を抱き、自分の顔を擦り付けながら満面の笑みをしていった。

「……ッ！ なにしてんだ！」

「いいじゃないですか。ここには私たち以外はいないんですから」  
オレの腕に抱きついたままいう。いつものオレなら「やめろ」と一言で一蹴して腕を引き剥がす。でも今日は「しよーがねーな」と言いつつ腕を引き剥がさず、琴音の好きにさせてあげた。なぜならと言つ明確な理由はないが、腕を組むくらい許してやる。そんな気

分だったのだ。

それからオレたちは、腕を組んだまま浜辺を散歩した。琴音に抱かれているところはとても温かった。だが、オレの心の奥で少しモヤモヤしたのを感じたのだった。

三十分くらいは、歩いただろう。

オレはその間琴音の顔をワザと見ないようにした。なぜなら、琴音がつらそうな顔をしていることを知っているからだ。

彼女は自分がつらい時に、他の人に心配をかけないようにいつも以上に元気に振舞うことがある。そして今、彼女が苦しんでいる理由もオレにはわかる。オレがああ劇をやることを許してしまったからだ。

「俺のせいであの劇をやることになって、ゴメン」

いつの間にかオレは耳を澄まさないで聞こえないくらいの小さな声で琴音に謝っていた。

「……いいですよ」

琴音もオレと同じくらいの声でゆっくりと答えた。

あれはオレたちが小学生三年生、琴音が二年生のときに、無理を言って地元の劇団の人たちからの協力を得て作った初めての劇だったのだ。言わば、あの劇がオレたちの始まりであって一番きれいな思い出……大切な劇なんだ。

あれは、オレが自分勝手に動かしているようなものじゃない。オレたちの心の中にそっとしまっけて置くべきものだったのだ。オレと琴音、優作、健人の中に……。

「本当に大丈夫です！ それにお兄ちゃんなら、『全てをなくしても劇を完成させる。』とか言いますよ」

彼女はオレを不安にさせないように微笑み続けてくれた。だが、その笑みがオレをより一層つらい気持ちにさせたのだった。



「ああ！ 頑張ろう！！」

オレも彼女をこれ以上苦しませないように、これ以上琴音に無理をさせないように笑顔で言った。

しばらく歩いた後、オレ達は優作の墓のある霊園に向かった。

霊園の中はとても寂しい空気だった。オレ達の他には誰もいなくて、冬の季節のせいで枯れてしまった木々が寂しさを強調させている。

到着したオレ達は、墓を水で丁寧にきれいにした。この時期に冷たい水を使うのはとてもつらかった。だが、文句を言わず作業をした。丹精こめてゆっくりと……。その光景は、まるで罪を犯した人が許しを乞うかのように……。

そして、墓に花を添えて、手を合わせ祈った。

今度の劇は、オレたちが初めて作ったあの劇をやることになったんだ。

勝手にあの劇をやることになってゴメンな。オレがつい口を滑らせちゃってさ……。本当だったら、ずっと心の中に留めて置くはずだったのにな。

それと、琴音のことは心配するな。お前に代わってちゃんと守ってやる。約束だからな。

オレは心の中にある思いを心の中で言った。オレが祈り終わって横を見ると、琴音は頬にうつすらと涙の後を残しながら泣いていた。

「お兄ちゃん、ゆるして」とつぶやく声も聞こえる。だからオレは何も言葉を発することなく、ゆっくりと彼女の肩に手をまわしてあげた。

「……………行きますか。正午さん」

何分くらい彼女の肩を抱いただろうか？ しばらくすると彼女はゆっくりと口を開いた。

それでも、彼女の顔にはいつもの笑顔が無い……。

「ああ。……それじゃあ！ 次はどこに行きたい？ どこにでも連れて行ってやるよ！」

まだ一時ごろだから時間はある。いつもだったらすぐに帰るが、彼女を元気づけるためにどこかに連れて行ってあげたかった！

「エッ!?!」

琴音はいきなりの提案に驚いている。それも当然だろう。自分で言うのもなんだがオレは、自分から彼女を遊びに誘うことはかなり少ない。

「どこでもいいぞ。お前の行きたいところに連れて行ってやる！」  
でも、今日は絶対にどこかに連れて行きたい……連れて行ってあげたいのだ。

「それじゃあ……、劇団の近くに新しくオープンしたケーキカフェに行ってみたいです！」

少し考えた後、少し暗くなっていた琴音の顔に再び明るさが戻ってきた。

「名前と場所はわかる？」

「はい！」

「じゃあ、そこに行こう！」

そして、俺たちはその新しくオープンしたケーキカフェ「トルテ」という所に行くことになった。

琴音が笑顔になったのはうれしい。……だが、あの人たちに会う事になってしまうとはなあ……

おお、なかなか綺麗なお店だな。

これが店の中に入って思った。第一声、改め第一想だ！ ……す

みません。自分でも意味不明です……。

とかなんだか、心の中でノリツッコミをしてしまった。

店の外装は清潔感が溢れている。そして中はというと、西洋を感じさせる内装で甘くていい匂いがオレの鼻をくすぐる。女の子が好きそうな少し小さめなカフェだ。

でも、

「いらっしやませー」

そこには、少しホワワーンとしたエプロンを身に着けた遠がいた……。

しかもそれだけではなく、

「あつ、正午君だぁ！」

「琴音ちゃんもいるみたいですね」

「正午!？」

「……せつ先輩。それに琴音ちゃんも……」

恵先輩に雅先輩、春樹、そして茜ちゃんがそこにいたのだった。

一瞬、……ほんの一瞬。オレの時間が止まった。

「先輩に茜ちゃん!？……それに春樹も？」

思わず叫んでしまった。なんでここにいるの!？

「……正午、そのオマケみたいな言い方はやめてくれない」

「……わりい」

付け足したように言ったのは、春樹にとって少し不服だったらしい。

「それで、なんでみんなここにいるの？」

いくらここが有名だからって、こんな偶然ってあるのか？

「俺が、その坊ちゃんと琴音ちゃんに教えてやったんだよ。その坊ちゃんがどこかおいしいケーキ屋を知らないか？ っって聞いて

きたからさ」

犯人はコイツか。

あの坊ちゃんとは春樹のことだろう。……ってなんで遼もここに  
いる！

「遼はここでバイトしてんの？」

「そうだぜ！　そして、今は遅めの昼休憩！」

しれっと言ってきた。ブイサインまで出してきやがって。……こ  
いつ勉強、スポーツ、芸術それに接客……。なんでもできるのか？  
「言つとくが、いくら俺でも楽器は使えないぜ」

こいつ、読心術もつかえるのか？どこのエスパーだよ！

「二人はどうしたのお？　もしかしてラブラブデートお？」

遼と喋っている間に、先輩は琴音に聞いていた。

「恵、二人つきりなのだからそうに決まっているでしょう」

「……そつ、そうなんですか？」

言わずにしてわかるとは思うが最初から順に恵先輩、雅先輩そし  
て茜ちゃんだ。

「そうなんですよ。正午さんがどうしてもって言うから」

ちよつと待て！　おかしいぞ！？　誘ったのは俺だが、どうして  
もなんて言っていないぞ！

遼と話していたが、なんだか不吉な言葉が聞こえたので急いでそ  
ちのほうを向いた。

「意外と正午って肉食だったんだ……」

春樹がまじまじと言ってきたがった。

「二人つきりになると変身するんだよ、きつと」

これは、いつの間にか会話に参加していた遼だ。

「勝手に人を変態扱いするな！」

言わせておけばオレは変態扱いされている。お前ら後で潰すぞ。  
心の中で黒い気持ちが増かんだ。

「ほ、本当ですか……?」

そして、それを信じてしまうような子が一人……。

「茜ちゃん、信じないで。嘘だから」

「嘘なんですか? ……よかった。でも、わたしは先輩がヘンタイ  
でも……」

だから変態じゃあ無いんだけど……。  
で、そういえば……。

「茜ちゃん、今日はびっくりしたでしょ」

変なことを言われる前に、オレは茜ちゃんに尋ねた。

「えっ、あっ、はい。……驚きました」

何のことだかわかったようで、彼女はみるみる内に赤くなってい  
った。

よかった。これだけで話しは通じたようだとおレは安心した。オ  
レだけしかわかってなかったら寂しいし……。

「雅先輩もありがとうございます」

オレは彼女の保護者というわけではないが、オレが雅先輩に頼ん  
だからと思つて先輩にお礼を言った。

「別にいいですよ。さすがに、朝起きてすぐに気絶されたのにつ  
いては驚きましたけれどね」

……やっぱりか。

「琴音ちゃんは正午の家に泊まったんだろ? なにかこいつに変な  
ことされなかった?」

「正午君、何かやつちやつたのお!?!」

「やってない!! なんて話しがそつちに行くんですか!?!」

「たく、ちよつと油断するとすぐにそつちを持っていかれる……。  
「正午、そのような淫らな行為を行ったのですか?」

雅先輩は先ほどとは違つて、オレを冷たい目で見ていた。……こ  
こにも冗談の通じない人発見。

「神に誓って琴音に変なことはしていません!」  
「なんだか、自分で言ってる悲しくなるなあ。」

「……なら信じましょう」  
十分くらいひたすら弁解をして、ようやく信じてもらえた。

本当ならもつと静かにお茶をしたかったが、騒がしいお茶になつてしまった。

その後、一時間くらいしたら、「これ以上若い二人のお邪魔をするわけにはいきませんわあ」といって先輩たちは帰っていつてしまった。

遼は、先輩たちが帰っていった後に、店の奥から来たキレイな女性に無理やり連れて行かれたのだった。……あの人が遼の上司かな？ みんなが居たことには驚いたが、結果として琴音がいつものように笑ってくれるようになったから結果オーライかな。

そしてオレと琴音は、もう少し休んでから店を出ようとした。

うん、店も綺麗だしケーキもおいしい。お店も、休憩するにはもってこいな優しく包んでくれそうな雰囲気漂っているし！ また、彼女が誘ってくれるような事があたらいつしよに来ようかな！  
もちろん、遼が休みのときに。

すると、先ほど遼を連れて行った女の人がやってきた。髪は雅先輩と同じで腰のほうまで伸ばしている黒髪。スタイルも良さそうだし顔もメツチャきれい。でも雅先輩とは違うのは、雅先輩の凜とした空気ではなく、優しく包み込んでくれるかのような空気を纏っている。

「あ、すみません。騒がしくしちゃって」

きつとこの人は、騒がしくしていたオレたちを注意しに来たのだらう。

だが違った。

「いえっ、そのことではありません……」

ここで女性は言葉を止める。そしてオレ達も、次にどんな言葉が出るか彼女の声に集中をする。

「すみません！」

……は？

「今日は私の幼馴染が迷惑を掛けてしまいませんでした。」

この人はいきなりオレたちに頭を下げてきたのだった。

「ッ！ イヤッ大丈夫です。いつものことですから。……それよりも、遼の幼馴染なんですか？」

色々なことについてだが、とにかく驚いた。

謝ってきたこともそうだし、全く予想外のことだった。遼は関西出身だからつきり幼馴染や友達は関西のほうにいるのだとばかり思っていたのだ。

「あつ。自己紹介がまだでしたね。私は、あまみやしずる雨宮静流と申します。彼とは物心つく前からの知り合いなのです」

なんていうか、「大人の女性！」という感じがした。髪はロングで少し青っぽい色。背は、オレよりも小さいようだが、纏う雰囲気がおレよりも大きく見させる。

そしてオレたちも自己紹介をする。

「オレの名前は、武内正午って言います。遼、……遼先輩とは同じ劇団に所属しています」

遼の幼馴染なのだから、さすがに「遼」と呼び捨てにするのは流石にまずいだろうと思ひ遼に先輩をつけた。でも静流さんは、そんなオレを見て笑った。

「フフッ、いいのよ。どうせ彼が無理やり呼び捨てで呼ばせているのでしょ。彼そういう性格だから」

「ッわかりました。それでこっちの娘も同じ劇団の……」

オレの演技が下手だったのもあるが、幼馴染なので遼のことをよく理解しているみたいだ。

「ハイッ！ 正午さんの彼女の鈴木琴音っていいいます。よろしくお願ひします。」

笑顔で挨拶をしている。

は？ オレの時間が再び止まる……

こいつ！ 初対面の人になんてこと言っているんだ！

「フフツ、君たちが、あの正午君と琴音ちゃんね。こちらこそよろしく」

静流さんはまた笑っている。笑うと綺麗さが割り増しだなあ、と軽く現実逃避。

「えつと……、あのつてなんですか？」

でも、逃避ばかりしてられないよなあと思い現実に戻る。

「あなたたちのことは、彼からよく聞いているのよ」

「……それは、どんな風にですか？」

いやな予感がした。そしてその予感は、見事的中してしまう。

「たしか、えつと……。そうっ！ いつどんなときでも二人でいると必ずイチャイチャしているラブラブカップルだって」

うわあ。ここがお店じゃなかったら頭を抱えて床を転がるころだった。もしくは、すぐに遼の下に行つて殴りたい、ボコボコに殴りたい……

「エッ！ 私たちつてそういう風に見えてるんですか!？」

「そんなわけないだろ!! 遼が適当なことを言ってるんだよ!!」  
バカなことをいつている琴音に、当然ツツコミを入れておいた。

「フフツ」

そんな、オレたちのやり取りを見ていた静流さんは微笑んでいた。なので、オレは顔は真っ赤だったが、なるべく平静なふりをして



静流さんのほうを向いた。

「笑ってゴメンね」

「いいですよ。気にしてませんし」

本当はまだメチャクチャ恥ずかしい。

「それで、ここにきた理由なんだけど……」

今まで笑っていた静流さんが真面目な顔をしながら、少し切り出しにくそうに言ってきた。

「ハイ？　なんでしょう」

「その、二人にお願いがあつて……遠くのこと監視してもらってほしいの」

は？　今日何度目だかわからないが、再びオレの中の時が止まる……。

「監視ってどういうことですか？」

いきなりの「監視」という言葉にびっくりした。すると静流さんはオレ達にわかるように説明してくれた。

「えっと……彼つてあんまり自分の言わないでしょ？」

この彼とは、もちろん遼のことであろう。

そしていわれて気づいた。遼は劇団の中ではかなりの古株である。だから遼は、劇団のみんなから相談よく受けている。だけど、遼が自分の悩みなどを他の人に相談しているところを見たことが無い。

琴音の方を見ると「そっいえばそっだ」という顔をしていた。

「そっいわれてみるとそっですね」

オレたちは頷きながら答えた。

「それって幼馴染としてはすごく不安なの。だから、彼が少しでも悩んでるような姿を見かけたら私に教えてほしいの。……頼めないかな？」

オレと琴音は一回お互いのこと見ていった。

「もちろんいいですよ」

「任してください」

「正午君、琴音ちゃん。ありがとね」

静流さんはとてもうれしそうだった。オレたちもこんなに人を大切に思っている人の協力をすることができて軽くだけれどうれしい。

「私のお願いを聞いてくれるのだから、なにかお礼をしなくちゃ……」

静流さんはそういつて少し考えている。別に、お礼をいわれるよなことはまだ何もしていただけどな……。

「そうだツ！ これからこのお店に来るときは私に言っ。そうしたら私がおごつてあげるから」

それはいいのか！？ 静流さんはとてもすごいお礼をしようとしてくれた。

「そんなの悪いです」

オレたちは断ろうとした。ありがたい話したが、そこまでしてもらうのはわるいだろう。それに、琴音ともかく、男のオレが一人でキーキカフェに来るなんてことはほとんどないだろうし。

「いいのいいの。無理を言ってるのは私なんだから、それくらいはさせて。……だめ？」

そんな風にいわれてしまうと、断ることが出来なくなってしまう。結局、その日の代金も静流さんが払ってくれた。まだ何もしていないのに……。

「あと、さつき遼くんが台本を忘れないように言っていたわよ。オレたちが店を出る間に静流さんは教えてくれた。」

店を出てオレはバイクに跨った。すると後ろに座ろうとしていた琴音が聞いてきた。

「遼先輩にあんな優しい幼馴染がいたなんて知っていましたか？」

彼女も遼に呼び捨てで呼ぶように言われているが、いつも先輩をつけて呼んでいる。……これが普通なのだと思うが。

「いやっ、知らなかったよ。でも、あんな人が遼の幼馴染なんてなあ」  
お淑やかそうだし口調も丁寧、その上顔もスタイルも良さそうだった。後ろのほうのことは、琴音には絶対に言わないようにしよう。

「ですよー。礼儀正しいしきれいだし優しいし……。正午さんあの人に浮気したらダメですからね」

琴音は半分冗談、半分本気な感じに言ってきた。いくら琴音の彼氏といってもオレも男だ。だから、年下で子供っぽい琴音より、大人っぽくてきれいな静流さんのほうが良いと思ってしまっただと勘違いをしてしまったのだろう。

「大丈夫。浮気なんてしないから。」

オレは、後ろでオレの服をつかんでいる彼女にの手を掴んで、やさしくに言っただけだ。

そう。オレは絶対に彼女を守る。もう二度とあんなに絶望した姿なんて見たくない！！

そして、オレたちはあのとときの台本を探すためにオレの実家と琴音の家に向かった。

健人には店を出たときに「明日一時に俺の家に集合！ あのときの台本をなんとかしてでも探し出して持ってくるように！」とメールを入れといた。だから健人のほうは心配いらないうらう。

ぶっちゃけ言えば、台本はひとつでも別に改造するのに問題はない。だが、例え昔の自分たちであろうが、実際に役をやってみた人のメモ書き等はとても役に立つ。なので三人の台本を全部集める必要があったのだ。

バイクを走らせて、まず最初に琴音の家に向かった。さすがに、女の子の部屋を調べるのは抵抗がある。だから、台本を探す作業はバラバラでやったほうがいいと提案したのだった。

琴音を降ろすときに「二時間後に迎えに来るからな。」と言って俺は自分の家に向かった。

そうして、オレは久しぶりに家に帰ったのだった。おそらく夏に帰って以来だから、三ヶ月ぶりであろう。

オレの家は、琴音の家からバイクで約五分くらいのところにある。オレの家からなら、道の都合により遠回りをするバイクよりも、近道のある自転車のほうが早いくらいだ。

そしてオレの家の見た目は意外と大きい……のである。周りの家と比べると倍くらいの大さがある。昔子供のとき、周りの友達が大きい大きいと言っていたので親父に「仕事何やってるの?」と聞いたことがある。でも「な・い・しよ」と言っただけでかかれてしまった今でも覚えている。……結局なにをやっているのだろうか?

家に帰るとお袋の「ちゃんとご飯を食べてるの?」や「たまには家にご飯を食べに帰ってきなさいよ。」の攻撃にあった。

オレは、この攻撃を受け流しつつ自分の部屋に向かい台本をさがした。

だが、部屋に入っていざ探してみると机の引き出しの中にアルバムと一緒にしまっているのを簡単に見つけてしまった。

……そういえば、この台本は大事なものだから、そのときのアルバムと一緒にここにしまったんだっけ。

あまりにも簡単に見つけてしまったので、他に参考になりそうなビデオ等も探した。

それでもまだ一時間ほど余裕が残ってしまった。なので、しょうが

なくお袋と一緒に居間でお茶をした。

「最近、連絡くれないけど元気にやってるの？」

「やっぱりバイクに乗るのは危ないからやめなさい。」

「劇のほうもいいけど、ちゃんと勉強してるの？」

心配してくれるのはありがたいんだけどなあ。無駄に広いリビングで、お袋はオレの向かい側に座ってずっと質問を続けていた。

お袋は、家にいる間ずっとこのようなことを言ってきた。

「……もう行かなくっちゃ」

もう少して約束の二時間だと気がついたオレは、家を出ようとした。

「今日くらい食べていきなさいよ」

それでも、お袋は引きとめようとする。やはり一人暮らしをしている息子が心配なのだろう。

「ゴメン、これから用事があるんだ。飯はまた今度で」

「……ハイハイ。わかったわ。身体にだけは気をつけるのよ」

しぶしぶ納得したお袋はそういつて見送ってくれた。そして、急いで琴音の家に向かった。

「あれ？ まだ見つからないのかな？」

家の前に彼女がいらないことに気づいたオレはつぶやいた。

五分くらい家の前で待っただろう。もう約束の時間は過ぎた。だが、琴音は一向に出てくる気配がない。

しょうがないのでインターフォンを押してみた。でも返事が無い。もしかして何かあったのか？ 心配になって家の中に入った。ついでに琴音の家は普通の大きさだ。昔はアイツら兄妹は、毎日のようにオレの家に遊びに来ていた。

「どうしたんだ？ 何かあったのか？」家に入ったオレは近所迷惑

にならない程度の声で言った。

「……………」

……返事が無い。彼女の部屋に向かつてみた。ここは親友の家でもあったので、この家の構造は熟知している。

「ここか？」

ノックをした後彼女の部屋を開けた。でも、琴音の部屋に琴音の姿は無かった。少し考えた後、オレはある部屋にいつてみた。

優作の部屋だ。

すると、予想どおり彼女は優作の部屋にいた。ドアは半開きになっており、そこから彼女がうずくまって泣いているのが見えた。

「……………ゴメンね、お兄ちゃん。ゴメンね」

琴音はオレに全く気づかない。

そして、小さな声でひたすらあやまり続ける。そんな姿を見て一瞬俺は動けなくなってしまい、あの時を思い出してしまった。

去年の十二月二十四日。あの日は、健人は家族旅行に行ってしまった。なので、オレ、優作、琴音の三人で優作たちの家に行き、クリスマスパーティーをやるはずだった。

オレがクリスマスケーキを持っていく予定で……………。

でも、オレと琴音は翌日に控えた劇の本番のため、いつもより帰りが遅くなってしまった。優作は、帰りが遅くなってしまったオレたちを迎えに来てくれた。もちろん、まだケーキを買っていなかった。

そして三人でケーキを買いに行ったのだ。

買うのに二十分くらいかかっただろうか。ケーキを買い終わった

オレは店を出た。

お店が混んでいたのもあったから、その間は二人は外で待っていらった。

二人は店から出てきたオレに気づきいて手を振る。

あの時の優作は笑っていた。

その瞬間、車のクラクションが道中に響いたのだ。オレたちからかけがえのない大切なものを奪ったあの悪魔の音が……。

「優作！ 琴音ちゃん！！ 危ない！！！」

凍った道でスリップした車が歩道に突っ込んできたのだ。優作は突然のことで動けなくなってしまった妹をオレのほうに突き飛ばした。

そして、車が優作のいるところに突っ込んだ。

「正午、俺は……った。……あえて。だから……  
・てくれ」

救急車に運ばれながら優作は何かを伝えようとしていた。だがオレは、何があつたのか理解できず、そのときは断片でしか覚えていない。

あの時、優作は何を伝えたかったのか。

いまだに思い出せない。……もしかして、オレは逃げているだけなのかもしれない

そして、琴音は自分のせいで兄を死なせてしまったと思ひ込んでしまい心を病んでしまった。ろくに食べ物も食わず、ただずっと部屋で泣いていた。だからオレは必死に琴音をあの絶望から救った。

あの一瞬で優作に頼まれたのだから……。これはオレの償いだから。

「……琴音」

そう言って彼女のことを優しく抱きしめてあげた。優作と誓ったのだ。彼女を守り続けると。

「正午さん」

琴音が元気になるまで、オレは琴音のことをやさしく抱きしめてあげた。耳元では「大丈夫。オレがいる」とずっと囁きながら。

十分くらいしただろうか。彼女は、元気になってくれた。

「……ありがとうございます」

よかった。あいつの部屋で彼女を泣かしたなんてあいつに顔向けができなくなってしまう。

「それにしても……。フッフ」

先ほどまで泣いていた彼女がいきなり笑い始めたので、呆気をとられながらもオレは問いかけた。

「どうしたんだ？」

すると予想もしない答えが……。

「正午さん、温かかったなあ」

いたずらな笑みを浮かべながら彼女は言う。その瞬間、オレの顔が真っ赤になるのを感じた。

「ねっ！ もう一回抱きしめてくれませんか？」

「やらん！！ 勝手にしろ！！」

これは彼女の空元気だ。もちろんわかっている。だが、今のオレにはその冗談がとても恥ずかしく、辛く、そして悲しく感じられた。

彼女だけでも幸せになってほしい。忘れるとは言いたくないが幸せになってほしい。

しばらくして、無事に台本を発見することの出来たオレは自分の家に帰ろうとした。



バイクにまたがりエンジンを掛けようとする。その瞬間、琴音が小さなバツクを持ちながら走ってきた。

「正午さん、置いていかないでくださいよお」

「ハア？……もしかしてお前、今日も俺の家に泊まるつもりか？」

オレは恐る恐る聞いてみた。

「ハイツ！」彼女は笑顔で言ってきた。

結局、オレは琴音に負けてしまい、二日連続で泊めることになってしまったのだった。

彼女のために……（後書き）

ここまでがちゃんと見直したところです。

それでもまだ誤字などがあったら感想にて教えてください

## New 台本作り

十一月二十二日、日曜日。

……今日こそはぐつすりと寝たかったのになあ。

七時にセットされた目覚ましを止め、重い目を擦り起き上がった。

それにしても、昨日の夜はもう散々だったなあ。

あれは、寝る前のこと……

「正午さん、また床で寝るんですか？」

「ああ」

琴音を泊めるときは、必ずオレは床で寝ること……これは、オレが決めた絶対のルールだ。

一応付き合っており、お互いの両親が認めているとはいえ、これは絶対に譲ってはいけない最低ラインだ。

「寒いし固いし……」

「大丈夫」

「琴音は気にしませんよ？」

彼女は、枕を抱き上目遣いというポーズを言っていた。

……ヤバイ

これ以上このことについて話すと、最低ラインまで突破してしまいうそだ。そんなことは絶対にしてはいけない。……オレはしてはいけない。

「オレが気にするの！ それじゃあおやすみ」

「寝ちやうんですか。お話ししょうよ」

「……明日な」

そして今に至る。

あれからすぐに寝ようと努力した。だが、床は冷たくて固い。そ

れにどうしても上で寝ている彼女が気になってしまい、あんまり眠れていなかった。……彼女の方は、すぐにスヤスヤと寝息をたてて眠っているようだった。

「おはあよう」

彼女はオレのベットにいなかった。……ということは、キッチンだろう。

「おはようございます、正午さん、もう起きたんですね。すぐに「飯の用意できますから」

オレの予想通り、彼女はキッチンで朝ごはんを作っていた。

「さむッ！」

まだ、寝間着だったのでオレは、服を着替え用とした。

「正午さん、目玉焼きと卵焼き。どっちがいいですか？ ……って何やってるんですか！？」

オレは、まだ着替え終わってなかった。なので、琴音にみごとパントリーの姿を見られてしまった。。

「早く服を着てくださいよ！」

彼女は手で顔を隠す。だが、指と指の間からしっかりとこつちを見ている。

「まてっ！ お前こつちを見てるだろ！」

オレは琴音を無理やり後ろを向かし、すぐに着替えた。

着替え終わり朝ごはんを食べた。いくらなんでも、朝から彼女にあんな姿を見られるとは……軽く恥ずかしいな。

「ああー。寒い朝に飲む味噌汁ってうまいなあー」

さすが出来立て！ 味噌汁を飲むと体がぼかぼかと暖かくなっていく。

「おいしいのは味噌汁だけですかー？ せっかく朝早くから用意したのにー」

「ここはからかってみるか。」

「そうだなあ。この味噌汁だけはうまい」

「そんなー」

ただこの一言だけで彼女は泣きそうになってしまった。

「冗談、おいしいよ!」

そういつて、オレは急いで琴音の頭に手を乗っけて言った。琴音はよくオレをからかってくる。でも、オレが少し仕返しを試みようとすぐに泣きそうになってしまう。

「本当ですか! よかったー」

彼女は安心したようで、ホッと息をついた。こっちもホッと息をついた。

「そういえば、健人先輩はいつごろ来るんですか?」

朝ごはんを食べるのを再開したら、琴音はそう聞いてきた。

「んー。一時ごろって連絡しておいたが……あいつのことだ、十二時半くらいには来るんじゃないか?」

健人はなぜか待ち合わせすると、必ず三十分前行動をする。

「そうですか。あと五時間くらいは余裕があるんですね」

「そうだな」

「どうします? お片付けでもしますか?」

「いやっ、別にいいだろ」

琴音と付き合い始めたときに、オレの家の合鍵は彼女に持っていかれてしまった。

そのせいで、彼女は用事が無くてもしょっちゅう遊びに来るようになってしまったのだ。そのため常日頃から部屋の掃除をしておかなければいけなくなってしまった。それに今日来るのは健人だ。そんなことをしなくても大丈夫。

「じゃあ、どうしますか?」

オレは「寝たい!」と言いたかったがやめておいた。こんなことを言っても絶対反対されるからだ。

「……久しぶりにこのあたりを散策してみるか!」

ここに住んでから半年以上は経っている。

引越してきた時に軽く家の周辺をしたことがある。だがそのときに回れなかった場所はまだ多い。

まだ時間も早いので店などは無理かもしれない。だが、公園や神社だったら大丈夫だろう。

「はい。それじゃあ、早く朝ごはんを食べて行きましょう！」

そうしてオレたちは急いで朝食をすまし、外に出る支度をした。

「アチー——」

だが、オレは急ぎすぎて危うく味噌汁で火傷をしそうになってしまった。

「ハアー」

外に出て息をはいたら息は白くなった。

「寒いですねえ」

そう言つて琴音も息をはいた。

「口の中はメツチャ暑いけどな」

「ハハハッ。正午さんは急ぎすぎなんですよ」

「ったく……それにしてもにしても、もう十二月かよ。早いなあ」

「誕生日にクリスマス。プレゼント期待して待ってますよ。正午さん！」

「ん？ 十二月つてお前の誕生日だったっけ？」

「ひどっ！ 忘れないでくださいよー」

子供みたいに頬を膨らましながら琴音はすねてしまった。だからオレはさつきみために彼女の頭に手を乗つけた。また泣かれそうになったりしたら大変だからな。

「ウソだよ。十二月二十五日だろ。プレゼント、期待して待ってるよ」

琴音の誕生日は十二月二十五日だ。去年は優作の件もあってろくに祝つてあげられなかった。なので、今年こそはきちんと祝つてあげたい。

「ホントですか！期待して待ってます！」

今さつきとは別人のように琴音は踊りだすような風に喜んでいる。  
「プーレゼントー。クーリスーマスー」  
……本当にこの娘は十八歳になる女の子か？

彼女の喜びようを見ていたら、いきなり強い風が吹いてきた。

「さむっ！」

体がブルツと震えた。

今気づいたが、オレは上着以外の防寒具を持ってくるのを忘れてしまっていた。

「大丈夫ですよ。ほらっ！」

目の前で踊っていた彼女は、そのことに気が付き、近づいてきて自分のマフラーをオレの首にもまわしたのだ。

オレの顔はマフラーのせいじゃなく、この琴音の行動による恥ずかしさのせいで、顔の端から端までが真っ赤になるのを感じた。

「ツなにすんだよ！」

「こっすれば寒くないでしょ？」

こっちを向き、微笑みながら言う。オレはそんな琴音の顔をろくに見ることができずにそっぽを向いた。

すると、たまたま幼稚園くらいの子どもをつれている親子が通りかかった。

そして子どもは「あのお兄ちゃんたち何やってるの？」と母親に聞いていた。そしたら「あんまり見ちゃダメよ。新婚さんなんだから」と言っつて子どもの手を引いていた。

おいっ！？ こんな若い夫婦なんているか！！

「琴音たちって夫婦に見えるんですかねえ？」

琴音にも今の会話が聞こえたらしい。

「そんなわけないだろ！！」

きつとまだオレの顔は赤くなっている。だからオレは琴音の顔を見ることができなかった。

「ああー！ 正午さん照れてるー」  
「うっさい！ 置いて行くぞ！」

そして、しばらく歩くとひとつの運動公園についた。  
「へえー。こんなところに運動公園なんてあったんだ」  
しばらく歩いたことで、さっきの恥ずかしさでの紅潮が引いてくれた。

公園には、まだ朝なのであまり人はいなかった。

「あ、正午さん！ 鳩があんなにいっぱいいますよ」

そう言われて、琴音が指を指しているほうを見る。  
すると軽く百羽は超えるくらいの鳩が我が物顔で公園の道を占領していた。

「パンの耳でも持つてくればよかったな」

鳩の大軍を見ながら言った。

「そうですね」

残念ながら今は鳩の餌になりそうなものは持っていない。

「……シヨーゴ、これ、いつしよにあげよ！」

いきなり隣から片言の日本語が聞こえた。

「ッ！！？？」

驚き、急いで横を向いた。するとそこにはオレの友人、サジがパンの耳の入ったビニール袋を持って立っていたのだ。

「ハロー」

「????？」

琴音は状況を飲み込めずにいた。

それもそうだろう、朝からいきなり知らない外国人に声をかけられたのだから。だからそんな彼女のために紹介をしてあげた。

「琴音、こいつはサジ・雅人。俺たちのサークルのメンバーなんだ。この前劇団に行った時は用事でこれなかったんだよ。……それでサジ、この娘は鈴木琴音って言って今度一緒に劇をやるんだ」



「オオ！よろしく、コトネちゃん」

サジは手を差し出した。いつもながらこいつは順応が早いな……。

「ええっ、よろしくお願いします」

琴音は恐る恐るその手を握り返した。いい奴だけど、いきなりだから怖いよなあ。

「じゃあ、シヨーゴ。はい」いきなり俺にパンの耳をくれた。

「ん？ なんだ？」

「ハトさんのえさだよ。いっしょにあげよう。コトネちゃんも」

そう言って琴音にもパンの耳をあげている。

「こうやってあげるんだよ」

サジはパンの耳をちぎってばらまく。するとたくさん鳩がやってきた。

「はやく、シヨーゴたちもやってみな」

オレたちもサジの真似をしてやってみる。そうしたら、サジのときと同じようにみるみるうちに鳩がやってきた。

「スゲー」

ただ鳩が集まってくるだけなのだが、とても新鮮で楽しかった。

「すごいですね！」彼女も楽しんでいるみたいだ。

「なれたら、こんなこともできるようになるよ」

サジは手にパンの耳を置く、やっぱりそこには鳩が集まってきた。

そんなサジの姿を見て、俺は聞いてみた。

「……慣れてるんだな。ここにはよく来るのか？」

「まいしゅうの、やすみにはかならずくるんだ。……ってくすぐったい、……あっ！」

「あっ」

……やってしまった。注意がオレにいったサジは、パンの耳を自分の足元にぶちまけてしまったのだ。さらにパンの耳が靴に入ってしまったみたいで足を鳩に突かれてる。

「イタツ、いたいよ。ハトさんやめてー！」  
……結局こうなるのかあ。オレは池のときに引き続き、今度は、鳩に襲われているかわいそうな大学生を助けてあげた。

「ハトさんのえさ、なくなっちゃった」

助け出されたサジは、襲われたことよりも鳩の餌がなくなっってしまったことにショックを受けていた。

「明日も休みなんだからまた明日あげに来ればいいだろ？」

いろいろな意味でかわいそうに思えたのでオレはサジを慰めてあげた。

「わかった！ また、あしたくる」

サジは元気を取り戻した。そして元気な声で挨拶をして帰っていたのだった。

「サジ先輩ってすごい人ですね」

元気に去っていくサジの後姿を見つめながら琴音は言ってきた。

「そうだよなあ」

そうしてオレたちはこの公園をでた。

公園を出てからも家の周りを散策し続けた。

遊具や噴水のある公園、動物園やおしゃれなカフェ。オレん家の周りには、まだまだ知らない場所がたくさんあったんだな。

気がづいたら時計は十一時を指していた。

「……あと二時間か。どうする？ どうかで昼飯でも食べていくか？」

ずっと歩いていたのでだいぶお腹が空いていた。

「それじゃあ、私がつくつてあげます！」

「いいのか？ お前もずっと歩きっぱなしで疲れてるだろ？」

琴音を無理させているみたいで少し気が引けた。だが琴音は、ガツポーズをしながら言う。

「大丈夫です。女優はなかなか体力あるんですよ！ それよりも正

午さんは何食べたいですか？」

本人もこう言ってるのだから大丈夫……かな？

「それじゃあ、オムライスで」

オレは自分の食べたいものを素直に言った。でも、そう言ったら彼女は笑い出した。

「クスツ。オムライスって、可愛いー」

「いいだろっ！ おいしいじゃないか、オムライス」

笑われるとは思わなかったからオレは少し恥ずかしくなってしまった。

「うまいじゃん！オムライス！」

「そうですね。それじゃあ、材料を買いに行きましょう」

そして

…… 琴音のつくってくれたオムライスはお世辞なしでおいしかった。食べた食器を片しながら先ほど食べたオムライスの味を思い出す。

「どうでしたか？」

琴音は食器を洗っているオレに聞いてきた。

「ああ、おいしかったよ」

素直に感想を述べた。本当においしかったからだ。そうしたら、彼女は驚いていた。

「ん？ どうしたんだ？」

「正午さんがちゃんとほめてくれるなんて……うれしいです……！」  
いきなり抱きついてきたのだ。

「っバカ！ いきなり抱きついてくるな！」

抱きつかれたせいでオレは手に持っていた皿を落としそうになっ  
てしまった。それに気がついて彼女は離れる。

「す、すみません。うれしくて……」

「まあいいよ。それにしても、最近本当に料理の腕上げたよな」

よくオレの家に来て俺のご飯を作ってくれている。だから彼女の料理の腕が上達しているのがよくわかった。

「そうですか？……なんか照れちゃいますよ」  
「恥ずかしそうに微笑む。」

それからオレたちは他愛のない話しをしながら健人を待った。そして十二時半過ぎ、玄関のチャイムが鳴る。

「はい」

そういいながら俺は玄関のドアを開けた。予想通り健人が立っていた。

「よっ、正午！」

「まっ、早くあがれよ」

そういつて健人を招き入れた。

「こんにちは、健人さん」

「琴音も挨拶する。」

「おっ！ なんだ。また琴音ちゃんは正午のところに泊まったんだな」

「健人は笑いながら言った。」

「なんで気づいた！？」

オレは驚いた。一昨日智沙が俺の家に泊まったことは知っているはずだ。だが、なんで昨日も泊まったことも知っているんだ？

「だって、家の様子見ればわかるだろ。……彼女のバックも置いてあるし、お前のベットの横には毛布がたたまれてる。……どうせお前は床で寝てたんだろ？」

「正解だ。」

「お前、演出やるより脚本家のほうが向いてるんじゃないか？頭の回転とか速いし」

「んなことねーよ。お前の顔にも書いてあったし、んなことなら誰でもわかるよ。それに、俺とお前、昔っからの仲だろ」

笑いながら言うてくる。俺ってわかりやすいのか？心の奥でそう

考えてしまった。

「それじゃあ、紅茶でもいれてきますね」

そういつて琴音はキツチンのほうに向かった。

「あっ、琴音ちゃん。俺コーラのほうがいいな」

ずうずうしく健人は言った。

「えっ、でも……」

「却下だ！ それにはコーラなんて置いてない！ 知ってるだろ」

オレは炭酸が苦手だ。だからうちの冷蔵庫には炭酸系の飲み物は入っていない。

「そうだったな」

またもやこいつは笑いながら言う。知ってるくせに。

琴音がキツチンの方に消えると、健人は声を潜めてオレに言ってきた。

「……お前は琴音ちゃんを彼女として認めたのか？」

「！？ なんだよ、藪から棒に！」

「その様子じゃあまだなんだな。そろそろはつきりさせた方がいいぜ？」

オレは彼女に告白されたときに優作のことを伏せて、健人に相談をしていたのだ。

「幼馴染だし、優作のこともある。……でも、これだけは言える！

長引かせれば、今以上に言い出せなくなっちまうぞ！」

辛いが、健人の言った言葉は的を射ている。

オレはあの時彼女に謝るつもりだったのだ。

だが、オレがここで彼女を振ってしまうとまた絶望の淵に戻ってしまうと思ひ、オツケーを出してしまったのだ。きつと彼女はまだオレのことを好きなんだろう……。

「紅茶の用意できましたよー」

琴音の言葉でオレは我に返った。

「オッ！ 紅茶淹れるのも上手くなったね。これは将来いいお嫁さんになれるぞ」

「そうですね？」

「本当だよ！俺もこんな彼女ほしいなあ。この果報者が！！」

健人はペシペシとオレを叩いてきた。

先ほどオレと喋っていたときとは違い、健人はいつもの様子に戻っていた。

「……正午さん。お口に合いませんでしたか？」

オレが飲んでいないことに気づいた琴音は心配した様子で聞いてきた。

「そんなことないよ。とっってもおいしいよ」

あわてて飲んだ。

「よかったー」

琴音はホッと息をついた。すると、オレの胸が一瞬スキッと痛んだ。

「それじゃあ。台本作りでもはじめるか！」

みんなが飲み終わったのを見計らって健人が自分の台本を取り出しながら言った。

……一回このことは忘れよう。今は台本だ。

「クリスマススの思い出」それがこの劇の題名だ。そしてこの劇のテーマは家族愛だ。

簡単に内容を説明するところだ

クリスマスイブの夜、主人公の少年は家族とケンカをして家をとび出してしまふ。

雪の中、町を歩いていると一人の老人と出会う。そして一本のろうそくを老人からもらう。

その後老人と別れて主人公は再び町の中を歩き出す。

しばらくするといきなりろうそくに火が灯る。気づいたら主人公は白い光の中に立っていたのだ。

目が光に慣れてくると主人公の今まで過ごしてきたクリスマススの思い出が見えてくる。プレゼントをもらって喜んでいる自分、家族と一緒に笑っている自分、サンタクロースをベットの途中で待ち続けている自分。

そして主人公の少年が生まれる前、心から自分の誕生を待ち望んでくれてくれている親の姿。

ろうそくの火が消える。そうしたら主人公は先ほど光に包まれた時の場所に立っていた。主人公は急いで家に帰ろうとする。すると道の向こうから走って来る親の姿を見つめる。そして主人公の家族はお互いを抱きしめる。

「青春物にでも直してみるか?。」

「主人公は元犯罪者! っていうのは?。」

「家族愛っていうテーマを変えてみませんか?。」

台本を読み終わってから、オレたちは正直に自分の感想を述べ、改善点を探した。このままでも悪くはないが、優作がないことがオレたちを辛くさせる。

……一時間くらい話し合いは続いた。

「やっぱり主人公と家族じゃなくて主人公と彼女って設定にしようぜ。最後にキスシーンなんか入れてみたりしてさあ。」

健人は琴音の案を採用しようとしている。

「……キスシーンの話しは置いておいて、確かにそっちのほうがいいかもな。」

正直言っておれも彼女の案はいいと思う。少しありきたりな内容

なってしまうけれど、こういう話が好きな人は多いと思う。

「ですよねえ」

自分のアイディアが通ったのがうれしくてニコニコしていた。

こうしてスムーズに台本の改造は進んでいき、気づいたらもう六時になっていた。

「あっ！今日は母さんに飯食いに帰って来いって言われてたんだっ！」

急に健人は立ち上がった。そして健人は急いで帰る支度をする。

「そうなのか？じゃあ、今日はこれで終わりにするか」

オレも立ち上がった。イテッ。足だしびれてやがる。

「わかりました。」

そういつて、琴音も片付け始める。

「わりいな。俺のせいで。」

申し訳なさそうに健人が言ってきた。

「気にすんな。……それよりも早く行けよ。おばさん、きつと怒ってるぞ？」

昔オレ、健人、優作は遅くまで遊んでいたせいで健人のお母さんに叱られた。あの時の怒り形相は今でも覚えている。オレのトラウマのひとつだ。

「ああ。ありがとうな。今度何かおごるから」

「オウ、期待しないで待ってるよ」

「……それと、外はもう真っ暗だから、琴音ちゃんを家まで送ってやれよー」

玄関のドアを開けながら言った。

「わかってるよー」

手を振り、笑いながら俺は答えた。

「おやすみなさーい！」

彼女も手を振りながら笑っていた。そして、ドアがバタンツと音



を立てながら閉まった。

「ツてな訳で、今日は家に帰ったほうがいいんじゃないか？」

「ええー!!!」

頬を膨らまして声上げる。

「ええー、じゃないだろ!? お前、三日連続で男の家に泊まるなんて高校にバレたら停学じゃあすまないかも知れないぞ!? それにそろそろおばさんも心配するぞ」

「バレなければいいですよ。お母さんには後で連絡入れますし」「ダメだ!……もしかしたら、合格決まった神田大学の合格取り消し、っていうのもあるかもしれないぞ?」

琴音、そして茜ちゃんはおれと同じ大学に通いたいが為、神田大学を受験したのだ。そして見事に、この前行われた公募推薦のテストで合格をした。

「それはイヤですー!」

首を振りながら言う。

「それじゃあ、今日は帰ろうな」

おれは彼女の頭にポンツと手を乗っける。

「ぶー」

それでも、琴音は口を尖らせて子どものように拗ねている。

「まあ、もう暗いから家までは送って行ってやるよ。だから機嫌を直してくれよ。なっ!」

「……………あつ。わかりました。それでいいですよ。」

少し考えた後、何かひらめいた様子で笑顔になった。

「ん? まあ、いいか。それじゃあ、先に下に行って待っていてくれ。いそいで行くから」

何にひらめいたかはわからなかったが、琴音に先に下に行ってもらった。そして、急いで外に出る支度をする。

「うん…………。じゃあ、よろしくね」

おれが琴音のところに着いたとき、彼女は誰かと電話で話をしてい

た。

「??? どうした？何かあったのか？」

「イ、イエツ!!! なんにもないですよ!!!」

明らかに何かを隠している様子だ。

「……まあ、いいか。早く後ろに乗りな。」

考えてもわからないしな。そしてオレはバイクをだした。

「……とうちゃく!!」

三連休の真ん中だったせいか、道路は思いのほか空いていた。おかげでオレのマンションから琴音の家までわずか三十分足らずで着いたのだ。

「じゃあ、明日の練習遅れるなよ」

そういつてオレは走り出そうとした。

「あつ!! ちょっと待っててください」

「ん？ 何か忘れ物でもしたのか？」

「……そうじゃないんですけど」

めずらしく彼女がはつきりしていない。

「何にもないんだったら行くぞ？」

「あの、実は正午さんに見てもらいたいものが、……ちょっと家に上がってもらえませんか？」

「??? ああ、いいぞ」

別に急ぐ用事もないからな。

「ただいまあー」

「おじゃまします」

すると、彼女のお母さん、そしてなんとオレのお袋が出迎えてくれた。

「お帰りなさい。それと、シヨーちゃんいらっしやい」

「……まったく、家では食べないのに、よそ様の家でご馳走になるうなんて」

「?? イヤッ、オレは……。っていうか、なんでお袋が?」

オレは目の前の状況を飲み込めずにいた。なんでお袋がいるんだ?

「そんなことよりも早く手を洗ってきなさい! ご飯冷めちゃうでしよ」

「ハアアア!」

琴音は、これでもかっていう位の満面の笑顔だった。

……やられた。きつとさつきひらめいたのはこのことだったんだな。

こうして見事に彼女の作戦に引っかけってしまったのだった。

「それにしてもシヨーちゃん、大学に入ってからカツコ良くなっちゃって」

おばさんは食卓に座るオレをまじまじと見る。なんだかすごく恥ずかしいぞ。

「カツコだけは一人前なのにねえ。……ちゃんと自炊とかしてるの? 全部琴音ちゃんにやらしてない?」

「ウツ……」

「ハアアア。やっぱり……」

「じゃあ、私が、正午さんに料理を教えてくださいます」

「まあ、良い子ねえ。本当、正午にはもったいないわ」

「そんなことないですよ」

琴音は少し照れる。

「そうそう、この子なんてシヨーちゃんに迷惑かけっぱなしなんだから」

「そんなことは……」

「もう二日もお世話になっちゃって。……シヨーちゃん。この娘、迷惑かけてない?」

「大丈夫です」

「そう?」

こんな他愛のない話しをしながら、オレは久しぶりに家族団欒の中で夕食を食べた。

琴音と食べるのも楽しいが、こうやっていろいろな人と食べるのもいいな。

そして、時間を見計らって琴音はオレを自分の部屋に呼んだ。

「すみません！」

部屋に入った瞬間、謝ってきた。

「別に良いよ。……久々に楽しかったし」

自分の頭を掻き、少し照れた。

「本当ですか？」

「うん、本当だよ。」

最初は驚いたが、意外と楽しかった。それに、一食分、お金が浮いたし。

「ありがとうございます。あつ、でも用事があったのは本当ですよ」

そう言っただけの学校の学校かばんの中身を出し始めた。バックの中には学校の教科書や彼女が調べたのであろう神田大学についての資料、そしてオレが彼女のために龍人先輩たちからもらった。一年次の履修表が出てきた。

「……正午さん、琴音だけだと単位の履修とかよくわからないので……教えてもらえませんか？」

本を抱きながら上目遣いという、可愛い格好で言ってきた。

これは、狙ってやっているのか！？ それとも天然なのか！？

「ん」。俺も詳しくはわからないぞ。それにやるんだったら茜ちゃんもいたほうがいいんじゃないか？」

再びオレは頭を掻いた。こんな風に頼まれるとノーと言えない。

「大丈夫です。むしろあの子、自分で聞くのが恥ずかしいから琴音に聞いてみてっってお願ひしてきたんですよ」

なんだか、茜ちゃんらしいなあ。

「ならいいか。……俺のわかる範囲なら教えてやるよ」

「ありがとうございます」

笑顔で琴音はお礼を言ってきた。

その笑顔を見たとき、一瞬オレは琴音のことをすごくカワイイと思ってしまった。そしてすぐに、昼に健人が言ってきた言葉を思い出してしまった。

『……でも、これだけは言える！ 長引かせれば、今以上に言い出せなくなっちまうぞ』

その後オレは、彼女の質問に可能な限り答えてあげた。

「……今日は本当にご馳走様でした」

「いえいえ、ろくにおもてなしもできなくて……」

もう夜も遅いので、俺は実家に泊まることにした。お袋たちは最後の最後までおしゃべりを続けていた。

「お袋！おしゃべりはそれくらいにしておきな。風邪引くぞ」

「あら、そうね。本当にありがとうございました」

「また、何時でもきてくださいね」

「正午さん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

先輩たちの涙……（前書き）

読みにくい小説ですみません！ 「ここが読みにくい」とかあれば  
いってください！ 感想待っています！

先輩たちの涙……

練習開始二日目。十一月二十四日

「だからあー!! ここでもっと怒っているのを強調させる為に、正午は琴音ちゃんを突き飛ばす勢いで!!」

「そこまでやる必要があるか!？」

「ここで主人公がヒロインに少しつらく当たったほうが、これからの回想のシーンでの後悔がよりわかりやすくなるだろ!？」

「……私も健人さんの意見がいいと思います。」

「いいとは思うけど危ないだろ!」

「大丈夫!! 正午は本当に軽く押せばいいの。後は、琴音ちゃんの演技力と俺の演出に任せろ! どうせ、二人つきりだと正午はもつとスゴいことしてるんだろ!」

「んなこと、するか!」

「グハツ!!!」

昨日のように……昨日と違って健人を狙ってパンチをくり出した。

本日の練習は、オレと琴音は健人と共に台本が完成したところまでどのような演技、演出を入れるかについて、先輩たちは台本の訂正、サジは春樹の監視つきで台詞の練習を行った。

多少の問題（サジが春樹の監視の目を振り切って逃亡したこと）もあつたが順調に劇の製作は進んで行っている。

「正午、琴音ちゃん。早く支度しろー」

そして、今日の練習も終わりこの前のように男性陣は女性陣を送っていくように言われたのだ。

「あー、先に行つててー。すぐ追いつくからー」

「茜ちゃんも先に行つてていいよー」

劇場の一番前にいたオレたちはもう帰り支度の済んで入り口の近くにいる健人と茜ちゃんに大声で言った。

「早く来いよー」「急いでねー」そう聞こえた後、扉が閉まる音が聞こえた。

「琴音っ。早くしろよ」

「ちよつと待つてくださいよおー。女の子の支度は時間がかかるんですよ」

「まったく」

「ほん・・に、・・。」

……ん？ 何か聞こえるぞ？ 今言ったのは俺でも琴音でもなかった。

「ホンマに雫の足が治るんか!？」

「ああ。この方法なら、きっと彼女の足がまた動くようになるはずだ」

気になって舞台の裏を覗いてみた。すると、そこでは遼とダンチヨーが何か話していたのだ。

「……だけど、今の雫の体力で無事乗り切れるんか？ そんな手術を乗り切れるんか？」

「大丈夫だ！ 今の彼女には、この手術に耐えられるだけの体力は備わっている」

「なら……」

「!!!??」

すると、遼はいきなり崩れて泣き出してしまったのだ。

それを見ていたオレは危うく声を出してしまうところだった。

「……ああ、今までよく頑張ったな」

ダンチヨーは遼の肩に優しく手を置いた。

そんな二人を見ていたら、オレはいつの間にか琴音の所に走っていた。



興味半分で聞いてしまったが、あんな遼を見たのは初めてだった。それに、罪悪感もあった。あの隼という人は、あいつの大切な人なんでしょう……

「正午さん、何やってたんですあ？」

オレが戻った時には、琴音はもう帰る支度を終わらせていた。

「わりい。じゃあ、早く帰るぞ」

「えっ!？」

彼女の手を引つ張つて急いで劇場を後にした。

「どうしたんですか？」

「……なんとなくな、……早く行こうぜ」

……あんなこと、興味半分で聞かなければよかった。

帰り道、そして家に帰った後もずっと気になってしまった。

オレだって優作のことを何も知らない人に勝手に聞かれるのはイヤだ。だから、遼もきつとイヤなはずだ。

翌日、十一月二十五日水曜日

昨日のことは遼に言うべきか？言わないほうが良いのか。……でも、言つてどうなる。何かできることはあるのか。

「どーした!! ショーゴー!!」

いきなり誰かに、でこピンをされた。

「なんだ？」

やはりというか、当然でこピンをやったのは健人だった。

……前もこんなことされなかったか？

「なあーに考えてんだあー。眉間にしわなんか寄せちゃってさあ」

オレが昨日のことを考えている内に授業は終わってしまったようだ。

「なんでもねえよ」

「なんでもないことないだろ。いつものお前ならもう少しはキチンとしてくれるはずだ。……悩み事、あるなら言ってみるよ」

健人がこう言ってくれるのはありがたい。

実際こいつは人の悩みや相談事を聞くときは親身になって聞いてくれる。

「……大丈夫。大した事じゃないから」

だからこそオレは相談しないことにした。オレには健人に秘密にしていることがあるから。

「……そうか、いつでも相談に乗ってやるからな」

わるい、健人

オレの秘密。それは健人に優作の事故の理由を教ええないということだ。

なので、琴音から告白を受けたとき、についてもあくまで、この時期に彼女を振っても良いのか、という内容だ。

こいつは良い奴だ。長年の付き合いでそれをイヤというほど知っている。

だから、本当のことを話すと余計にコイツを傷つけてしまう。……それはどうしてもイヤだ。

「今日も元気に頑張るぞー!!」

練習を始められる人数が揃ってから、遼は号令をかける。

昨日見たような姿はアイツから見受けられなかった。

「今日は、まだ高校生組と中学生組が来てないからそいつらが来るまで正午とサジのシーンの練習に入るぞ」

「わかったよ」

「……ああ」

そして練習は始まった。

「その人、ちょっといいかい？」

「??？」

「そこにいる、君だよ」

「なんだ、何か用か？」

「暇なら少しこの老いぼれの話につきあってくれないかい？」

「????？」

「大丈夫、すぐに済むから。」

「やっぱり、サジはすごいな。」

いつもは誰かが見ていないと不安だけど、一度舞台上がると完璧に役になりきる。

今は、この劇に出てくる一人の老人の役になりきっていた。

「ストップ！今のシーン、正午は驚く感じじゃなくて呆気を取られる感じにしてみてくれ。」

このシーンは、主人公のオレが、ヒロインの琴音とケンカをして一人寂しく歩いているシーンだ。

今の演技を見ていた遼が俺たちの演技を止めて指導をしてくれる。

「……オツケー」

昨日見たことが少し後ろめたくて、遼の顔を見ることができない。

「ま、いつもみたいにポーっとしてれば良いんだぞ」

「……ああ」

「オイッ!?ここは『違うだろ!?!』とか突っ込めよ!！」

「あ、ワリイ」

「どうしたんだ、シヨ、」

その時、劇場のドアが勢いよく開いた。

「すみません！ホームルームが長引いちゃって!！」

そこには琴音と茜ちゃん、そして何人かの高校生が息を切らして入ってきた。

「……んじゃあ、切れも良いから休憩にするか。今来た人たちは、十分後までに用意しておいてね」

「ハイッ」

高校生たちは、元気に返事をした。

一瞬、遼はオレに向かつて何かを言いたそうな顔をしていたけれど、結局何も言わずに休憩に入るようにみんなに言った。

オレは、琴音のところに行こうとした。なんだか、無性に彼女のところに行きたくなったのだ。

だが、彼女のところに着く前に一人の女の子がよって来た。

「正午先輩、こんにちは」

「……ああ、茜ちゃん、こんにちは」

なかなか珍しいことだ、彼女のほうからやってくるだなんて。

「えっと……、今日は、私たちが来るまでどんなことをやっていましたか？」

さらに珍しい、彼女のほうから話題を持ってくるだなんて……

でも、茜ちゃんは、こんな変哲のない会話でも茜ちゃんは顔を真っ赤にしているんだよなあ。

……それに、その上目遣いで見てくるのもやめてくれ！　なんかすごく恥ずかしい。

「今日は、オレとサジのシーンの練習をやったんだ。しばらくは、オレとサジのシーンを集中的にやるんだって」

「そうなんですか」

そういつて、微笑んでくる。この娘、狙ってやっているのか？　それともただの天然なのか？……　つとか考えていると、

「シヨゴさん！」

とか言いながらいきなり誰か……　というか彼女が思いっきり抱きついてきた。

「琴音っ！！　いきなり何すんだ！！」

こんなことをする女の子は彼女しかない。でも、こんな彼女の行動が今のオレにとっては、すごくうれしかった。

「だって……。正午さん、また浮気してるんだもん」

つとかなんだか思ったが、理由がメチャクチャだなあ。

「……だから、浮気なんてしてない！ オレが浮気するようなやつに見えるのか？」

「いいえ。全然見えません」

琴音はハッキリと言いつつ切った。

「そうそう。こいつに浮気するような度胸なんてないさあ」

健人も言っつけてきた。

「っていつか、お前はどこからやってきた!？」

「俺は、お前の影の中から、いつもお前を見守っているぞ」

「ダメれ、ストーカー野郎！ それに悪かったな、浮気する度胸が無くて」

「……でも正午先輩？ 浮気するような度胸は、なくて良いんじゃないんですか」

「……それもそうだな」

茜ちゃんが、もつともな事を言う。

「まっ、お前が浮気してるところを見るのも楽しそうだけだな」

「……お前は何なんだ？」

「だから、さつきから言ってるだろ、俺はお前の影の中から、みま、」

「消え失せる、このストーカー!」

「グハツ!!! っとなると思ったか!」

「なに!？ 避けやがった!？」

オレが健人にブローをしようとしたが、こいつ避けやがった。

「そんなに嫌なら、お前は今日からハムスターだ!」

「はっ!？ なんで？」

……また意味不明なことを言いやがって、こういうところ（意味不明なところ）がなければ、最高に良いやつなのになあ。

「毎日、観察できるだろ!」

ああ、コイツ殺してえな。

「それに、お前を動物にたとえるとそんなもんだろ。なあ、二人とも？」

ハムスターに似ているだなんて、初めて言われたぞ。

「そんなことないですよ」

お、琴音が珍しくオレをフォローしてくれるのか？

「シヨーゴさんは、ハムスターじゃありません……犬です！ ね、茜ちゃん？」

「そこかよ！？ 突っ込むところ、そこかよ！！」

「え……正午先輩？……猫？」

「……なんか、もういいや」

少し……？ 疲れた。だが、みんなといるとすごく安心する。

そんなこんなでオレの休憩時間は過ぎていった。

「サンタクロースはなぜいると思う？」

「??……人に夢を与えるためなんじゃないのか」

「それじゃあ、君にとって『夢』とはなんだい？」

「……わからない」

「……そうか、長々とすまなかつたね」

本番ならこの台詞を言ったら後に照明を落として、迫り（舞台床下から俳優、大道具などを乗せて迫り上げる装置）を使いサジを下ろす。そして、主人公役のオレにライトを当てる予定だ。

でも、まだ練習なので遠の手を叩く音で中断した。

「リヨー、どうだった？」

いつものサジに戻った。

「んー。もうちょっと台詞をゆっくり、溜める感じがほしいな……」

「ハイ」

「それで正午」

「……ああ」

休憩時間は、琴音たちに振り回されていたから忘れることができ

たけど、本人の前に立つと、どうしても昨日の光景を思い出してしまう。

「どうしたんだ？ さっきから調子がよくないけど。……何かあったのか？」

「・・わるい」

その通り。今日のオレは自分でもわかるくらい演技に集中できていない。

「まだ時間があるつといても、あと一ヶ月しかないんだぞ。……何か悩みがあるんなら相談に乗るぞ？」

遼はふざけていない。でも、今のオレには遼には打ち明けることができない。

「大丈夫。……ちょっと寝不足だけなんだ。顔洗ってくるよ」

こんな自分が、オレは大嫌いだ。

人にウソをついて、自分にもウソをついて、それを騒ぐことで忘れようとする自分が……

「……わかった。それじゃあ、次のシーンはとばして過去のシーンの練習に入るぞ！！ 子どもたちは用意してくれ！！」

……ゴメン、遼。そう思って俺は水道のほうに向かった。

やっぱり、正直に打ち明けたほうがいいのだろうか？ このままじゃあ、他のみんなにも迷惑をかけてしまう。

「あつ……」

顔を洗い終えてから気づいた。……タオル忘れた、バックの中に入れてあったのだが、持ってくるのを忘れてしまった。

「どうぞ、正午さん」

そういつて誰かが、綺麗に置かれたハンカチを渡してくれた。

「ああ、どうも。ありがとう」

渡されたハンカチで拭き声のほうを見るとそこには琴音が立ってい

た。

「琴音。どうしたんだ？ 練習は……」

なんでここに琴音がいるんだ？ 今、舞台の方で練習をしてるんじゃないかったっけ？

「大丈夫です。今は私の出番じゃないし。……それに、正午さんが気になっちゃって。」

そう言っただけで彼女は優しく微笑んだ。

「……ごめん。」

ついオレは謝ってしまった。

「いいんです。それでどうしたんですか？ 今日の正午さん、何かおかしいですよ？」

「……」

彼女は、返事をしないオレに詰め寄ってきた。

「昨日、いきなり琴音の手を握ってきたり、さっきの休み時間だつて、無理やり元気にふるまってたみたいでしたし、演技にも集中しきってなかったですし……」

「……琴音」

「昨日、あの時に何かあったんですよね？ 寝不足だから、なんてウソですよね？」

彼女はオレの正面に立ち、まっすぐオレを見ている。

「遼先輩と何かあったんですよね。私、誰にも言わないんで教えてください。……」

「……」

「……」

「……」

「……」



言い終わると再び前を向いて歩いていった。

その日の帰り、オレたち二人はみんなの誘いを断って二人で静流さんのいるカフェに行った。

「あら、正午君に琴音ちゃん。いらっしやい」

そして、カフェでオレたちを迎えてくれたのは静流さんだった。

「静流さん。ちょっといいですか」

「……ええ。ちょっと待ってて」

雰囲気で気づいてくれたみたいで彼女は店の人に断りを入れ、オレたちの座っている席に来てくれた。

「……遼君のことではなにかあったのね？」

「そうです。正午さんが遼先輩となにかあったみたいなんです」

「琴音もいつもとは違いまじめだった。」

「静流さんは、震って人を知っていますか？」

オレもオレなりの誠意として嘘偽りなく正直に静流さんに聞いた。

「…………ええ。知っているわ」

静流さんもきちんと返事をしてくれた。そしてオレは、昨日あったことを詳しく二人に説明をした。

話しが終わるとほんの少しだけ沈黙が走る。

「……遼君、頑張ってくれたんだ」

この沈黙を破ったのは静流さんだった。目には涙があふれている。

「これで、……これであの子も」

遼のように泣き崩れるまではいかなかったが、目に涙をためて、うれしそうだった。

「すみません。オレ……こんな大切なことを盗み聞きしちゃって」

「静流さん。正午さんを責めないでください。こんなことになったのは事音にも責任があるんです！」

「いいよ。琴音。オレのせいだから。君はなんにもわるくない」

「そんなことないです。あの時、私が早く片づけをしてれば……」

これは誰も悪くない、悪いのはオレだ。  
でも、琴音は自分のせいだと言い切るうとする。すると、静流さんが俺たちに優しく言った。

「いいのよ、二人とも。私、それに遼もあなた達を責めたりなんかしないわ」

「……本当ですか？」

うつむいていた琴音がゆつくりと顔を上げる。

「ええ、だから正午君も顔を上げて……」

「でもっ……」

ゆつくりと顔を上げた。

「確かに、このことは私たちにとって大切な事よ。でも、聞いてしまったものはしょうがないじゃない。……それに、正午君は盗み聞きした事を悔いて私に正直に告白してくれた。それでいいの。私は二人を許すわ」

オレはとてもうれしかった。それに、昨日から胸にあった後悔の気持ち少し楽になった気がする。

「まだ、遼も、それに私も、琴についてをあなた達に教えることはできないわ。……でも、いつか絶対に教えるから、その時まで、もう少しだけ待ってもらえる？」

「はい」

「ありがとうね」

「静流さん、ありがとうございます」

だから自分の心からの気持ちやハッキリと言ったことができた。

「はいっ！ これで暗い話は終わり！！ せっかくだから今日は食べ歩いてきなさい。私がおごってあげる」

静流さんは手を叩き、場の暗い雰囲気を変えてくれた。

だから、オレたちも「ありがとうございます！」と返事をしてこのお店の絶品ケーキを頂いた。

**問題解決……また問題発生！（前書き）**

すみません！ 作者は受験生のため、ここ半年以上小説を更新することができませんでした！ すごい久しぶりの更新なんで、足りない部分が多いでしょうが、暇な人は付き合ってください！

問題解決……また問題発生！

翌日、十一月二十六日

あと、練習できる期間は一ヶ月をきった！

全力でがんばろう!!!

オレは、一昨日聞いてしまったことを遼にちゃんと打ち明けた。

「……そうか、あの話、聞いたつたんか」

いつもの遼と違い、真面目にオレの話を聞いてくれた。

「まさかあの時に、俺たち以外にも人がいたんか。こりゃあ、失敗だったなあ」

そして、こうも言ってくれた。

「正直に言うてくれてありがとな。近いうちに、キチンとお前に話すから、もう少しだけ待つてくれや」

「え？」

正直「お前最悪だな」くらい言われて、殴られて絶交されるくらい思っていた。でも遼はオレのことを怒らなかつた。

「何で……、何で遼は怒らないの!? これって遼にとってすごく大切な事なんじゃないの!？」

オレは叫んでしまった。オレだったらこんな風に許すことなんて絶対にできない。そして、オレが叫んだにもかかわらず遼は落ち着いていた。

「……まあ、しょーじき言つと驚いたわ。でも、正午は聞きたくて聞いたんじゃないんやろ? ならいいんや」

なんで? 何でこうもあっさりと許せるの?

「でも……」

「それに、過去に帰ってやり直すことを可能にするようなスーパーアイテム、なんかこの世に存在しないんだしな」

「オレは……」

「うっさいのー、ワレ」

ビシッ！ オレの一瞬を突いて遼はでこピンをしてきた。

「そんなにウジウジしとおお前に教えておいてやる！」

遼は胸を張って言った。

「どんなことするにも、最後に決断をするのは自分自身や！ このことについてはお前を許す。それがワイの決断や！」

グツと自分に向けて握りこぶしの親指だけを立たせ、自分に向けた。

「だから、自分にウソをついてまで前に進もうとするなや！ カツコ悪くても、迷いに迷って、そして 自分が納得いく答えを探し出してから進め！ それでも一步を踏み出す勇気が持てなかつたら相談をしろ！ お前の周りには、俺や琴音ちゃん、それに劇団のみんながいるんだからな！」

遼は、オレ、そして自分に言い聞かせるかのように高らかと言い切った。

きっと遼は自分なりに答えを出して進むことができたんだ。

「オツケー！ ありがとうな、遼」

遼は昔っからのオレの目標だ！ 劇についても。それに今日、遼みたいに心も強くなりたい。

「気にすんな！ 練習に行こうぜ！」

「おう！……！」

そんな遼になれるために頑張る！

そうして練習は始まった。

「そんなことない！」

琴音はオレの服を引っ張る。

「やめろ！……！」

そういつてオレは琴音を振りほどき、軽く押した。そして琴音

は、少しオーバーなアクションで回転をして、マットの上にボフッと倒れる。

「カット！」

遼の掛け声と共にみんなの動きが止まる。

それと同時に少し離れていたところにいた茜ちゃんと遼がやってくる。

今日は高校生組が最初から練習に参加している。なので、劇の最初から練習をすることになった。

昨日とは違い、きちんと練習に集中できる！

そして今のシーンは、主人公がヒロインを突き飛ばすシーンだ。  
「ウーン、何かが違うなあー」

遼は頭を悩ましていた。

遼は、オレが打ち明けた後もいつもと変わらない態度で接してくれた。

「どうしたんだ？」

少しも距離を置こうとしない。それがうれしい。

「ああ、何かが違うんだ。でも、その何かがわからなくて……」  
さっきのシーン。……オレは特に感じなかったけど。

「琴音もそれは思っていました」

そうやって二人は「ウーン」と唸る。

しばらく二人がうなっていた。  
すると、

「あのお、こうじゃないんですか」

そうやって、茜ちゃんが遠慮がちに手を上げた。

「ちょっと、正午先輩。こここのところの演技をやってみてください  
「ああ」

オレは彼女の言われるままに位置につき、演技を開始した。

「そんなことない！」

茜ちゃんはオレの服引っ張る。彼女の悲しみに満ちた声が聞こ

える。

……やっぱり茜ちゃんも舞台上に上がったら変わるなあ。どう変わるかというと、なんていうかオーラみたいなのがガラッと変わるんだよなあ。

「やめる！！！」

そしてさっきと同じようにオレは振りほどき軽く押した。

今の茜ちゃんの演技は、さっきやった琴音の演技と確かに違っていた。

彼女の演技は、無理にオーバーなアクションをしようとしなかったのだ。オレの押した力に逆らわず、ゆっくりとゆっくりとマットの上に落ちていく。そんな感じだ。

「そうだ！ その感じ！」

「すごい、茜ちゃん！！」

彼女の演技が終わった瞬間二人が言った。きっと二人が悩んでいた所が今の茜ちゃんの演技で解決したのだろう。

無理矢理にアクションで表さそうとせず、声や演技、その他の人の力を使ってゆっくりと演技をすることで彼女は、ヒロインの娘になりきっていた。

「きつと琴音ちゃんは、無理にオーバーなアクションをしようとしていたからだよ」

起き上がり、ポンポンツと服をはたいてから茜ちゃんは説明をしてくれた。

「でも、お客さんから見たら、少しオーバーなアクションのほうがいいんじゃないの？」

「ここはシリアスなシーンだから、あえて少し軽めのアクションにするんだよ！ 後は健人先輩の演出、それと琴音ちゃんがどこまでヒロインの気持ちになりきれるかだよ！」

茜ちゃんが熱弁していらっしやいます。演劇のことになると彼女は変わるようだ。サジと同じような体質？ なのであろう。

「ハイッ！ わかりました、茜ちゃん先生！」

そしてこちらも変なノリに……。

「フフツ よろしい！ それでは、これからも精進なさい！」

「ハイッ！ 先生！」

これは一体なにごっこなのだ！？

そして、琴音と茜ちゃんは二人で、何度も倒れたりして練習に没頭していった。

「やっぱり、あの二人は良いコンビだな」

遼がオレの隣に来て言った。

「そうだなあ」

覚えたり台本を読み解く力は琴音が上回っている。でも、登場人物の感情の表現を演技する能力は茜ちゃんが上回っているのだ。

この二人は、お互いの足りないところをお互いに言い合って改善していく。だからこそ、どちらがヒロインの役を取ってもいがみ合わないのだろうな。

きつと、二人の年齢が同じだからだけでなく、お互いがお互いを認め合っているからあんなに楽しそうに演技ができるのであろう。

「オレたちもウカウカしてたらあの二人に負けちゃうな」

そして琴音の前には、オレよりももっと気軽に、もっと簡単に頼ることが出来る人が現れるだろう。

「じゃあ、俺たちもお互いのことを理解し合ってみるか？」

そういつて遼は笑う。

「それは遠慮しとくよ」

オレも続いて笑った。

オレは二人の練習風景を見て、こんな平凡だが幸せな毎日が続いてほしいと思った。

バキッ！！！！ と大きな音を立てて、そんなオレの願い簡単に



打ち砕かれてしまった……

彼女たちの後ろにあったパイプの固定器具が音を立てて壊れてしまったのだ。二人は気づいていない。

「琴音！ 茜！」

それに気づいたオレは、すかさず二人に向かって叫び、走っていった。二人は突然のことで何が何だかわからず、走ってくるオレの顔を見つめている。

「チクシヨウ」

これじゃあ、もう間に合わない！ オレは咄嗟に二人を押し倒し、二人の前でパイプから二人を守る。

一瞬、優作の姿が浮かんだ……。

ガシャツ！ ガシャン！！

パイプの大きな音が舞台に響くのと同時に、オレの背中に強い衝撃が走った。その衝撃は途切れることなく、何度も何度もオレに襲った。

……でも、それでも倒れてはいけない！ 足を着いてもいけない！ 守るんだ！

琴音はオレを見ながら叫んでいた。それは、いつもの明るく、暖かい琴音の声ではなく、一年前の優作の事故の直後の時の様な悲痛な叫びだった。

「だい、じょうぶ、だ、こと、ね。どんな、ことがあって、も」  
お前を守る。そう言いたかったが言えなかった。

頭に強い衝撃が走って目の前が真っ暗になる……。それでもオレ

は倒れない。そして音が止み、もう身体は何も感じない。

「正午さん！！！！」

「先輩！！！！」

オレの耳に二人の声が聞こえる。手に二人の温もりを感じる。よかつ、た……。オレ……は、守れ、たんだ。

聞こえてくる二人の声を聞いて安心したオレは、ゆっくりと倒れた。

「正午！！！！ 誰でもいいっ！！ 早くどかすの手伝え！！！！」

「救急車を呼べ！！」

「先輩！！！！」

「オイッ！！！！ ウソだろ、正午！！！！」

ああ、みんな……わりい。

そこで、オレの意識は完全に途切れた……

「正午。お前の夢って何だ？」

高校二年生の春。

琴音の入学式が終わり、オレと優作は琴音と健人を校門の桜の下で待っていた。

そんな時、今までオレたちの真上で咲いている桜に目を向けていた優作が、突然オレのほうを向いて話をした。

「は？」

「将来の夢だよ」

「どうしてまた……」

とうとう頭がおかしくなったのか？ いきなり訳のわからない質問を投げかけてくる親友を見て思った。

「だってよ、去年は荒れに荒れて夢どころじゃなかっただろ」  
「そういえばそうだよな」

確かに、去年は散々だった。

入学式の帰り道、いきなり「俺様がこの学校の番長だ。金をよこせ」とか言う、時代錯誤な変なヤツに絡まれたのだ。まあ、口ほどにもなかったから一分もかからず倒せたけど……。でもそのせいで「新しい番長の誕生だ!」とか言われて、一年生の一学期の間は優作や健人以外、拳句には先生たちも「危険人物」として認識された。結局、オレは先生や高校の友達から信頼を取り戻すために、学校行事とかで苦手な勉強とかで必死に挽回しようと頑張ったのだ。

「俺は、ハリウッドで演出の技術を勉強する!!」

「私はお嫁さん!!」

いつきたのかわからないが、いつの間にかやってきた健人と琴音ちゃんが自分の夢を語った。

「よ! 健人に茜ちゃん」

「……琴音、『お嫁さん』って……今年で十六になるヤツが言うかよ……」

オレはやってきた二人に挨拶をして、優作の方は、先ほど自分の妹が言った夢に対して、大きくため息をついた。

「いいじゃん、琴音ちゃんなら良いお嫁さんになれるよ」

そんな姿を見てオレは、優作ではなく彼女のフォローをした。

当時、彼女はオレに対して兄貴分以上の好意を抱いていなかった。当然、オレも彼女に対しては妹のようなものだったので、優作が琴音に対して呆れることがあったら、すぐにオレが彼女のフォローをしてあげる、という関係が成り立っていたのだった。

「さすが正午先輩。物分りが良くてカッコ良い。そこにいる、お兄ちゃんとは大違い! ベーっだ!」

そう言うと彼女はオレの元によってきて、オレの背中に隠れて顔

だけを ヒョコツ と出して、実の兄に向かって可愛らしく舌を出していた。

「かまわねえよーだ」

コイツもそっぽ向いてるし……。相変わらず二人は似たもの兄妹だな。

そんなことを思いながら、オレは彼女にこう尋ねた。

「友達はできたか？」

もしかしたら、実の兄よりも過保護かもしれないが、高校でできた友達の良し悪しは、これからの高校生活を大きく左右してしまう。だからオレ、それに本当の兄は、その点に対してのみ、大切な妹（分）の心配をしていた。

健人は「このシスコン」とか言ってきたいるがシカトだ！

「うん！ 鷺沢茜ちゃんっていう子と友達になったよ！」

「よかつたな」

目を輝かせながらいうからには、いい友達ができたようだな。

「うん！」

「まったく、こうして見ると俺よりも、コイツの兄貴っぱいな。：

…それで、正午の夢は何なんだ？」

そんなオレたちの様子を見て、優作はあきれ果てていた。

「ウーン、とりあえず今は、高校の仲間や劇団のみんなと一緒に劇を創っていくこと……。かな？」

「夢がねえな、正午！」

健人はつまらなさそうに言った。

「いいの！ オレは現実主義なんだから。……。それで優作お前の夢は？」

「えっ！？ 俺の夢？」

「言えよ。みんな言ったんだから次はお前だぞ」

「そうそう。早くいいなよ。お兄ちゃん」

人の夢を聞いてくるくせに、自分の夢を話そうとしない優作に、

オレたちは無理やり話させた。

「まったく。絶対笑うなよ！……俺の夢は、みんないつまでもこうやって楽しくしゃべり続けること、かな」

「なんだよそれ！」

「クサツ！！！」

「それはないよお」

オレたち三者三様の反応を示して、おもいつきり笑ってやった。

「笑うんじゃねえよ！！！」

「クツ… かつこいい夢だな。いいと思うぜ。ハハハツ！」

オレは笑いを押し殺そうとしたが、結局笑ってしまった。

「だから、笑うな！！！」

「ハハハツ！！！！」

「だから笑うな！！！」

「わりい、わりい。……こうやってみんなといつまでも一緒にいられればいいな」

「二人の言う通りだな！ みんなでバカ騒ぎしようぜ！」

「さんせー！！！」

健人も琴音ちゃん、それに優作……みんなでいつまでも一緒に、確かに最高の未来だな。

「つてな訳で、これから琴音ちゃんの入学を祝してカラオケにでも行こうぜ！」

健人の提案

「オオー！！！！ 歌うぞー！！！！」

「琴音の歌に、聞き惚れないくださいよ！」

「……正午に琴音、明日から練習があるんだろ？ ほどほどにしておけよ」

「大丈夫！！！！」

そこで夢が終わり、オレは目が覚めた。  
確かあの次の日、オレと琴音は見事に声が枯れてしまって、遼に叱られたんだってけ。

………っというか、ここはどこだ。

起き上がろうとしたら、体が思うように動かず、その代わりに体に痛みが走った。

そっか……確かオレは琴音たちを助けて下敷きになったんだっけ。

体にギブス等はない……でも、足が痛くて動かない、腕も右腕が動かない、唯一左腕だけが動く。

「正午先輩！」

ベットの横には茜ちゃんがちよこんと椅子に座っており、オレの唯一動く左手を握っていた。

「正午先輩、気がついたんですね！」

彼女は、オレに抱きついてきた、その瞬間、体に痛みが走ったのは言うまでもない。

「あっ、すみません」

そのことに気づいたのか、彼女はすぐに離れてくれた。

彼女の目は、真っ赤に染まっていて、……オレを、ずっと看病してくれてたのか。

「よ、よかった……、グスッ、……ほんと、うによかった。ウツ、正午先輩が、無事、で、本当によかった……」

彼女は、それだけ言つと声を上げて泣きはじめてしまった。

……！？ 泣き出した！？

「あ、あかねちゃん！？」

えーつと……、今、起きたことを思い出そう。

オレが目覚まして、彼女が気づいて、泣き始める……… 回想終了！……！

「あー、えー、」

彼女は、泣きやむ気配がない。まだはつきりと動いていない頭だけど、それくらいは理解できる。

「あん、な、に……無茶なこととして、これで、先輩が、い、いなくなったら、と、思ったら………」

「茜ちゃんごめんね」

オレは、彼女が泣き出したことによって自由になった左手を、彼女の頭に乗つけて撫でてあげる。

「しよ、正午先輩………」

「ごめんね」

段々と、頭がハッキリしてきた。

「そ、そんなこと、ないです、よ。先輩は、わ、わたしと琴音ちゃんのために、………」

「それでも、ごめんね。………心配かけてごめんね」

もしもだ、もしコレでオレが死んでしまったら、琴音だけでなく茜ちゃんにも深い傷をつけてしまうことになる………。

そんなになっちゃってしまっただらと思うとオレは、彼女に謝ることしかできなかつた。

「………それじゃあ、もう少しだけ、もう少しだけこうしていてください。」

「オッケー」

そしてオレは、彼女の頭に乗っけている手にほんの少し、力を入れて優しく撫でてあげた。

オレはまだ生きている。

五分くらいが経っただろうか、茜ちゃんは泣き止んでくれた。

「それで、ここはどこ？」

彼女が落ち着いてから、オレは真っ先に気になっていた問題を口にした。

「あ、はい！ 正午先輩はあの後意識を失っちゃって。ダンチヨーさんの病院に運ばれたんです」

「ダンチヨーの病院かあ」

何度か検診や予防接種で来たことがあるけど、こういう形でまたお世話になるだなんてなあ……ん??

「茜ちゃん、今日って何日？」

「えっと、今は二十七日の午後九時ですよ」

「マジ？」

「はい」

わああ。って言うことは、オレは一日近く意識不明だったのか。

「……それで、茜ちゃんはずっとこうやっていてくれたの？」

「い、いえ……今日、お見舞いに来れなかったから、夜にお見舞いきたら、正午先輩のお母さんに少しだけって頼まれて……」

心なしか茜ちゃんの目が動いている気がするが……。

「そうだったんだ、ありがとう。茜ちゃん」

「どういたしまして、先輩」

かわいく微笑んでくる茜ちゃん。いつもは、モジモジしていて俯いていることが多いけれど、本当は彼女はかなり可愛い女の子だ。

いつもからもっと笑えばいいのに……って、オレが言うのは失礼だな。

……って、もう一つ気になることがあったんだ！、



「茜ちゃん、琴音は！？ ここにいるのか！？」

「そうだ！ 琴音はどうしたんだ！？ あいつも怪我をしてしまったのか！？」

「おっ、落ち着いて下さい。怪我に響いちゃいます」

「そういつて彼女はオレを落ち着かせようとした。オレは無理やり起き上がるうとしていたのだ。オレを制した彼女の顔には一瞬影がさしたように見えた。」

「……ゴメン。それで、琴音は？」

彼女に促されるままベットに横になる。

それでゆつくりとこれまでの経緯を彼女から聞いた。

「あの後、そばにいた人たちが急いで救急車を呼びました。そのときにはすでに正午先輩は気絶してしまっていて……」

ここで茜ちゃんは言葉を濁す。

その瞬間オレはいやな予感を感じた。

「琴音ちゃんは、先輩を見たらいきなり叫び始めたんです。誰が声を掛けても叫びやまなくて……」

「……それでどうしたんだ？」

「五分くらいしたら琴音ちゃんも気絶しちゃって、今はここで入院しています」

「……」

やはり、琴音もオレと一緒にあの時のことを思い出してしまったんだな。

何せ、オレも一瞬アイツの姿が見えたくらいだもんなあ。

「あ、でもダンチョーさんは、一時的なものだって言っていました。今は、夜遅いから眠っていますが、もう意識ははっきりしています」

「そうか……」

「それじゃあ、わたしはダンチョーさんと呼んできますね」

「そういつて茜ちゃんは出て行ってしまった。」

「はあー」

一人になるとため息が出てしまう。

せつかく琴音が昔のように笑ってくれるようになったと思ったのに、またこんな事故が起きてしまうなんて……。

「……こんなんじゃない、あいつに会わせる顔がねえよ」

オレはあれだけ彼女のことを任せると優作に言っていたのに、結局守れなかったのだ。

すると、ドアがガチャツと開いた。

「正午君、大丈夫かい？」

そこにはダンチョーと茜ちゃんがいた。

「ええ、なんとか」

体を起こそうとする。だが、ダンチョーはそれを止めた。

「無理をしてはいけない。骨には異常はなかったけど、全身にひどい打撲を負っていて、その上に頭を強く打ち付けてしまったのだから」

「そうです。無理はしないでください！」

隣で茜ちゃんも言ってきた。彼女の声は、すこし叫びに近かった気がする。

「つかオレってそんなに怪我していたんだ……体が動かなかったときに少しおかしいとは思ったけれど……」。

「正午君、茜ちゃん」

ベットの横に来たダンチョーが、オレたち二人の顔を見ながら頭を下げた。

「今回は私の不注意によってこんな事故を引き起こしてしまって、本当にすまなかった」

「そんなんっ、気にしないでください。」

動く左手をブンブン振った。

ズキッ！ あ、手を振ったから体に軽く痛みが……。

「いいや。一歩間違えれば怪我じゃすまなかったかもしれない。も

しかししたら死んでいたかもしれない。この通り、すまなかった」  
もうダンチョーは土下座でもするかの勢いだった。

「ダンチョー、オレはピンピンしてるから大丈夫です。頭を上げて  
ください」

もちろん、自分でもわかる位の空元気だ。でもこれくらい元気に  
見せないと、ダンチョーはさらに心配をしてしまうだろう。

「本当にいいのかい？」

「はい！ピンピンしてますよ！」

「ありがとう。そう言ってもらえたのがせめてもの救いだよ」

なんとか空元気が通じたみたいだ。

「それよりも、今から何か検査でもするんですか？」

「あ、ああ。その様子なら、心配はないとは思いますが軽く検査をやら  
せてもらおうよ」

「わかりました」

さっきまで暗い雰囲気だったけど、ようやくいつものダンチョー  
に戻ってくれた。

「それじゃあ、君の名前と通っている学校は？」

「えっと……オレの名前は武内正午、神田大学の英文科一年生」

「それじゃあ、私の名前は？」

「……？……早蕨風明さん？」

ヤバイ、忘れてた。いつもダンチョーと呼んでいたから本名が一  
瞬出てこなかった。

「この女の子の名前は？」

「鷺沢茜ちゃん」

こっちは大丈夫だ。

「このボールペンの芯を出してみてください」

そう言って一本のボールペンを渡される。

「はい」

普通に芯を出した。

それから、十問ほど簡単な問題を出された。オレはその問題をすらすらと答えていく。そして問題がおわったらダンチョーは持ってきた紙に何かを書く。

「……うん、頭のほうも大丈夫そうだね」

紙に何かを書き終えたダンチョーはオレのほうを向いた。

「それじゃあ、すぐに退院できるんですか？」

「すぐには言えないけど、早くて三、四日。遅かったら一週間弱」

「そんな、劇の練習は……」

「その方は大丈夫。遼が「主役は正午君しかない！」だから、打撲が引いたら、絶対に動かさないから台詞の練習だけさせてくれ！  
って言ってきたからね」

「それじゃあ、」

「ああ、役は変わらないで君が主役のままだよ」

「ありがとうございます！」

「よかったですね」

「ご家族と劇団のほうには私から言っておくよ」

検査をしている間、邪魔をしないようにと病室の隅のほうで椅子に座っていた茜ちゃんも、いつの間にかこっちに来て一緒に喜んでくれた。

「うん。……それで、琴音のほうは」

「琴音ちゃんもおそらく一時的なパニック状態に陥っただけだからすぐに退院できるはずだよ」

良かった。自分の体も心配だったが琴音も無事だと聞いて安心した。

「でも、」

「院長。二〇三号室の患者さんの容態が……」

どこからともなく、一人の看護婦さんがやってきた。

「それじゃあ、私はこれで失礼するよ。なにかあったらベッドの横にあるボタンを押してくれ。すぐに飛んでくるから」

ダンチヨーは部屋を出ようとした。

そっか……。ダンチヨーはこの院長だからか。でも一体、なにを言おうとしたのだろうか？

「ダンチヨー。頑張ってください」

「ああ。頑張るよ。……それで、」

ん？ なんだろう？

部屋を出ようとしていたダンチヨーが立ち止まって言った。

「茜ちゃんにお礼を言っておきなよ。昨日からずっと正午君の看病をしてくれていたのだからね。」

「えっ……。ダ、ダンチヨーさん、それは、」

部屋を出て行くダンチヨーの背中に向かって茜ちゃんが言った。

そしてドアが閉まった。

「せ、先輩。そんな、ずっとだなんて……」

茜ちゃんは顔を真っ赤にしていた。

「……ありがとうね。茜ちゃん。」

こんな彼女を見ていたら、いつの間にか感謝の言葉を言っていた。

「そ、そんな。私が助けてもらったのだから……」

「それでも、ありがとう。オレと一緒にいてくれて」

そういつて彼女の頭にポンツと手を乗つけた。

すると。

グー。

どこからともなく、って言うかオレの腹がいきなり鳴ってしまった。

「フフツ。それじゃあ、リンゴ剥いてあげるので待ってください」  
彼女はまだ顔が赤いがいつもの感じに戻った。オレは少し、イヤッ、かなり恥ずかしかった。

まっ、茜ちゃんもいつもみたいに帰ってくれたから結果オーライ

……かな？

「はい、正午さん。リンゴ剥けましたよ」

その後、彼女の剥いてくれたリンゴはウサギの形でとてもかわいかった。そして、このリンゴはいつも食べているリンゴよりすこしおいしい感じがした。

そして一つの疑問。いま彼女がオレを呼ぶときに、いつもの「先輩」じゃなくて琴音と同じように「さん」なかったか？ ま、いつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3912k/>

---

Dear 大切な人へ

2011年1月19日21時25分発行